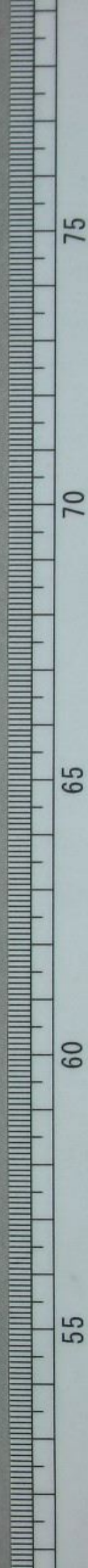


碁立絹篩前編

79
641
1



門子 80
第 641
卷 1-08

選奕亭京水先生著

碁六絹篩

全八冊

東都書林

青藜閣藏版



棋法絹篩序

北山 山本喜六撰

渾沌肇判天清地濁在之中間者物皆有對彼
我為之立焉爭競為之起焉於是乎罵人以
好訟為聖人觀其如斯創造棋戲寓夫傲虐
之質於此以消日不興發慝亂之想所以全不
肖之子也神駘之智盛矣哉大兵哉以其
能消寂寥之日鎮擾躁之想不翅不肖之人
沈惑之若魅乎野狐雖為人韻士亦坐隱乎

新館序
古松流水，一問相友琴瑟書畫，中於是
奕神益王居則執槁中遊石室出則升
赤墀入青蒲或侍將師於帷幕遂成
其鎮物情之功然而後從事於此者日多乎
日達者並出各出人意匠定陣列之法立攻
守之規着之有變化之機一着萬機贏
輸無期一逞絕失厝滿枰致敗覆嗟呼經
國者勒兵去之復有類乎於此籌策一過
謬豈千里也哉患害惟一國生民之性命

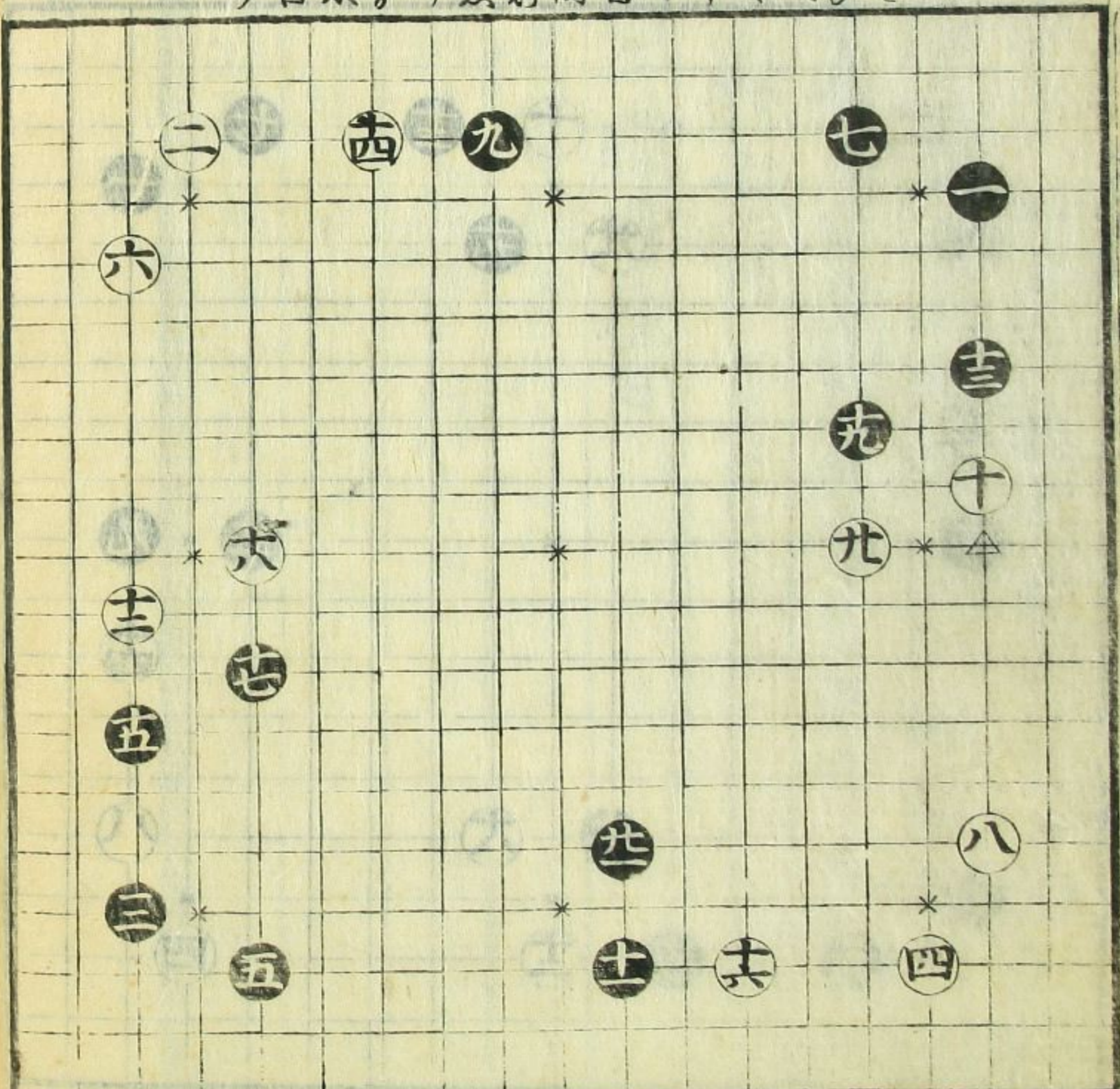
故為之長者抑可不用心乎往寶曆中選
奕亭京子者著碁法絹師備舉深溪攻守妙
趣蓋其所名取密之精，無一點污麗其又
其石法子當時有藝名皆閱而善，肥前人
筒城杏林為舊序今茲書肆某等欲梓而
公之來而請序於予吾日者既有感於圍碁
之觀世所謂奕者專精致志唯奕師之信之尊
奕家別有家法有家級一從事於此受之業
者終身守其法而不叛其師奉其級而不悔

三五
五拾銭

才一之二

二十一正

此右立四角封勢と
同く左少く黒九の
白十の目下△直
おはして斯の如く
らふ事黒白成り
此形おて位より
黒はくけてハ能白
の地おとむむの附
兵を角を分るたは
勢しておとめ
さくらん要をたう
又黒九の附よ白
おすして要よ未
お附九のよ白
十の目下おと
撮り

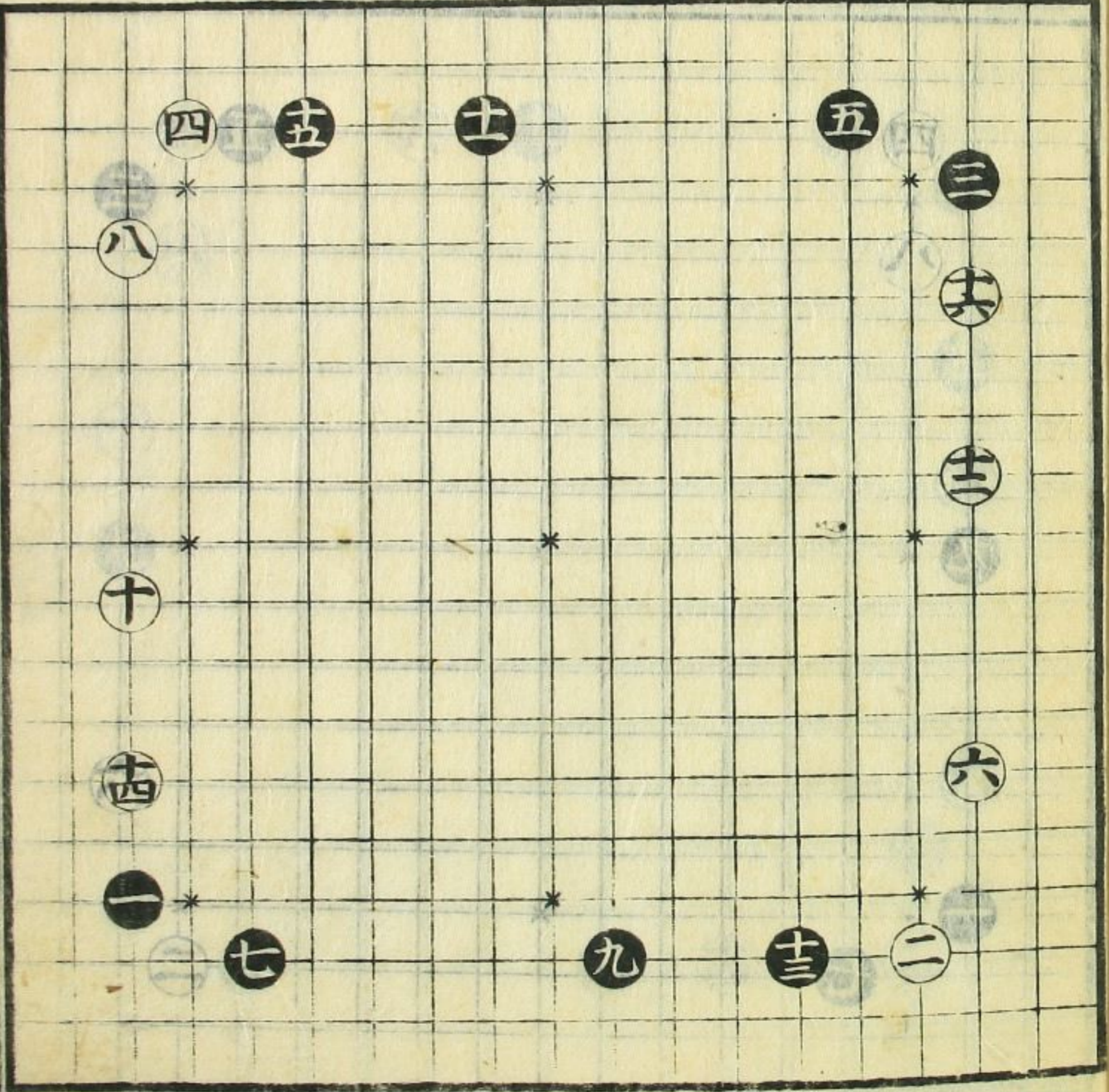


才一之三

十六と

白六と桂馬小
お附と斯のよ
やく黒より九の
おとさきり
口傳

Handwritten notes in the left margin, including the characters '口傳' and other illegible text.

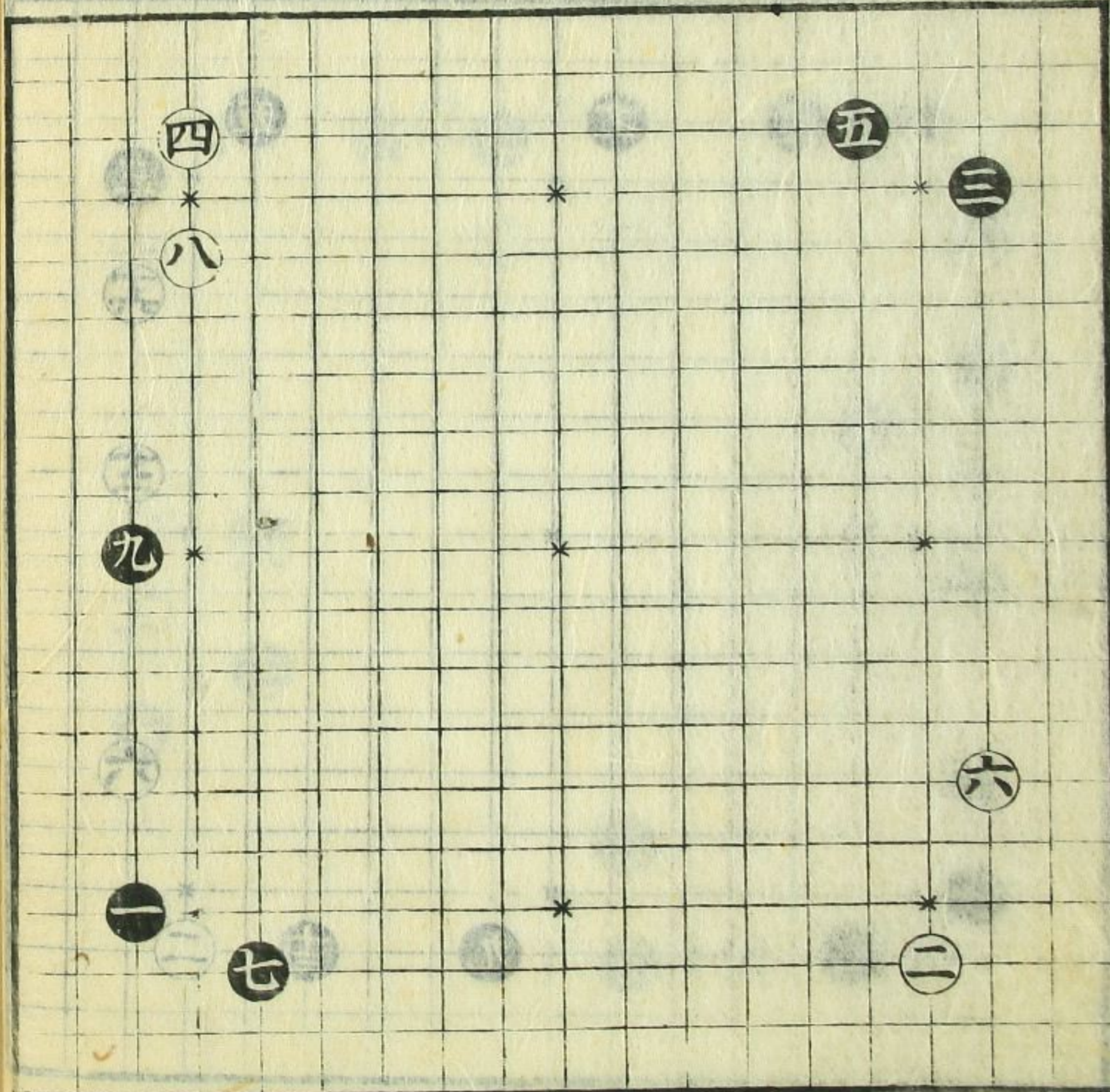


書立肩飾
卷之二

才一三回

九才七

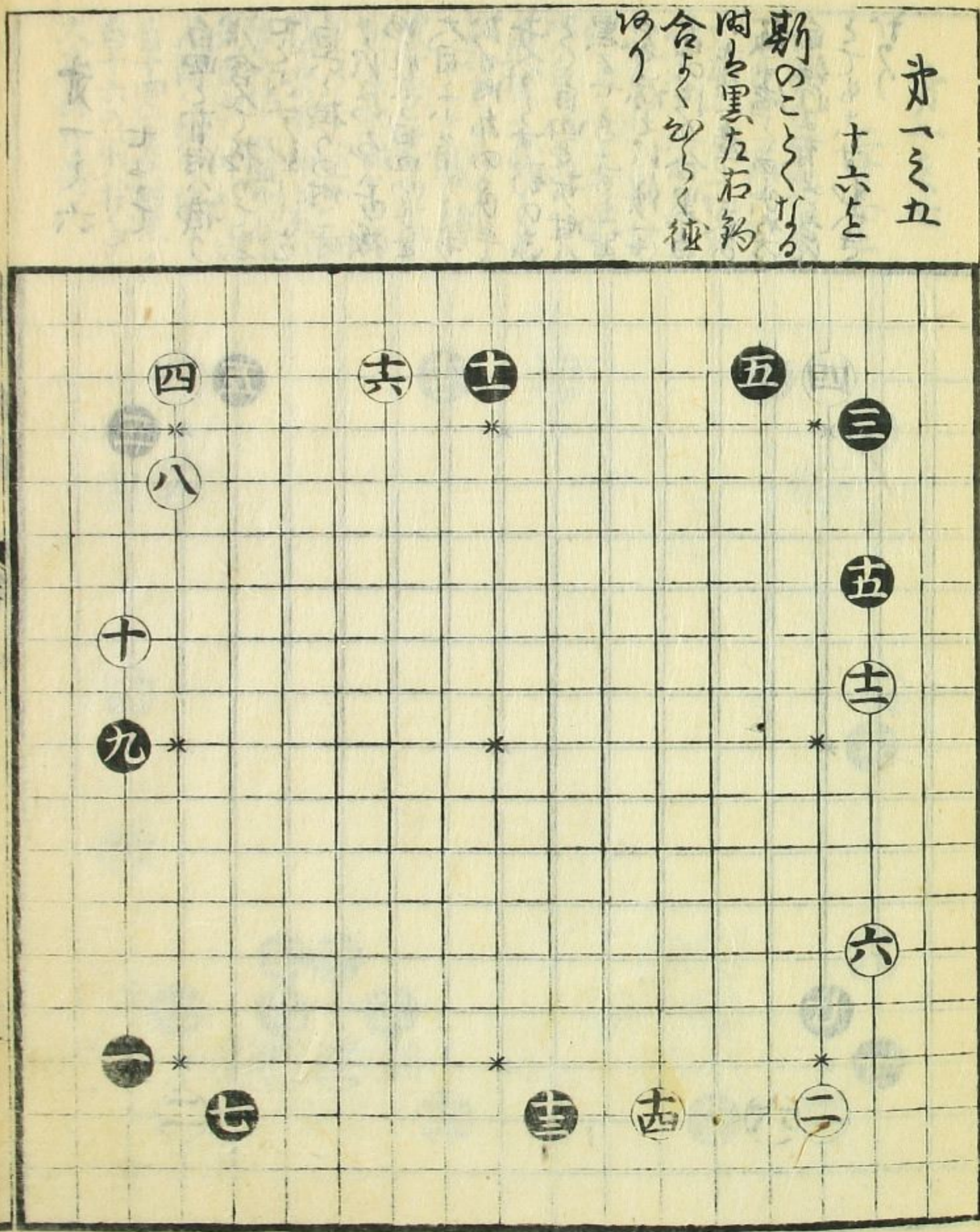
赤のこころ白
六と大桂る才七
毛白の母大目に
河野時八黒より
九と才七也
口傳



才一三五

十六才

斯のこころなる
河と黒左右約
合より才七
河

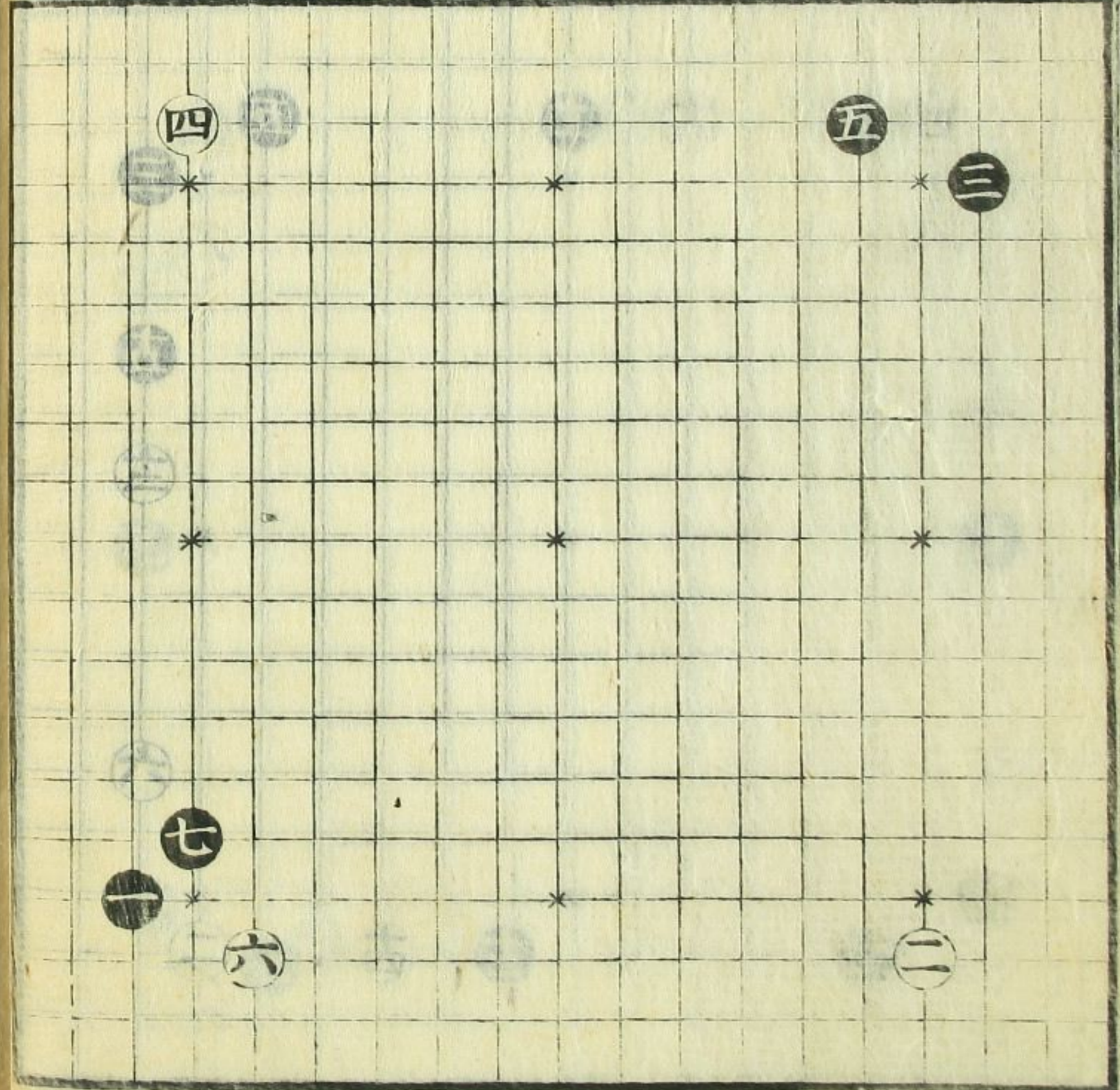


才一三五
十六才

才一之六

七才て

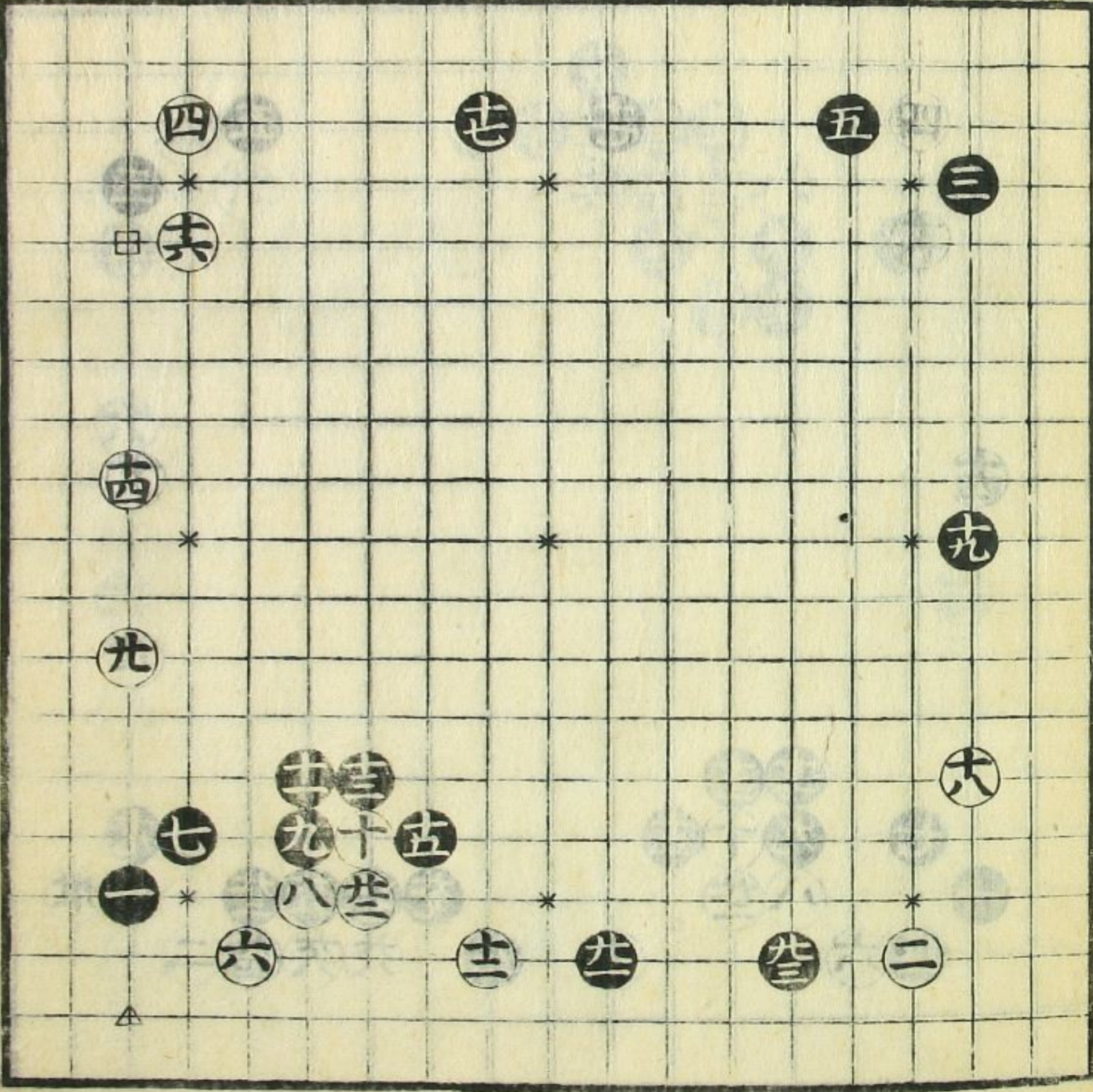
白四と有附ハ掛り
残合見て格りて黒
七と才すしハ一を
白六と掛りの内才
才はよらうハ掛
ゆれば白四の才を
大目ハ小角ハ才
たる附外の才ハ
才入りし才野の才
とく白四と才附ハ
黒七と才すしハ一を
才の才に候ハ才
才の才に候ハ才
の才に候ハ才
白は依りて四の才
白は依りて四の才
とても才すしハ一を
才り



才一之七

二十三と

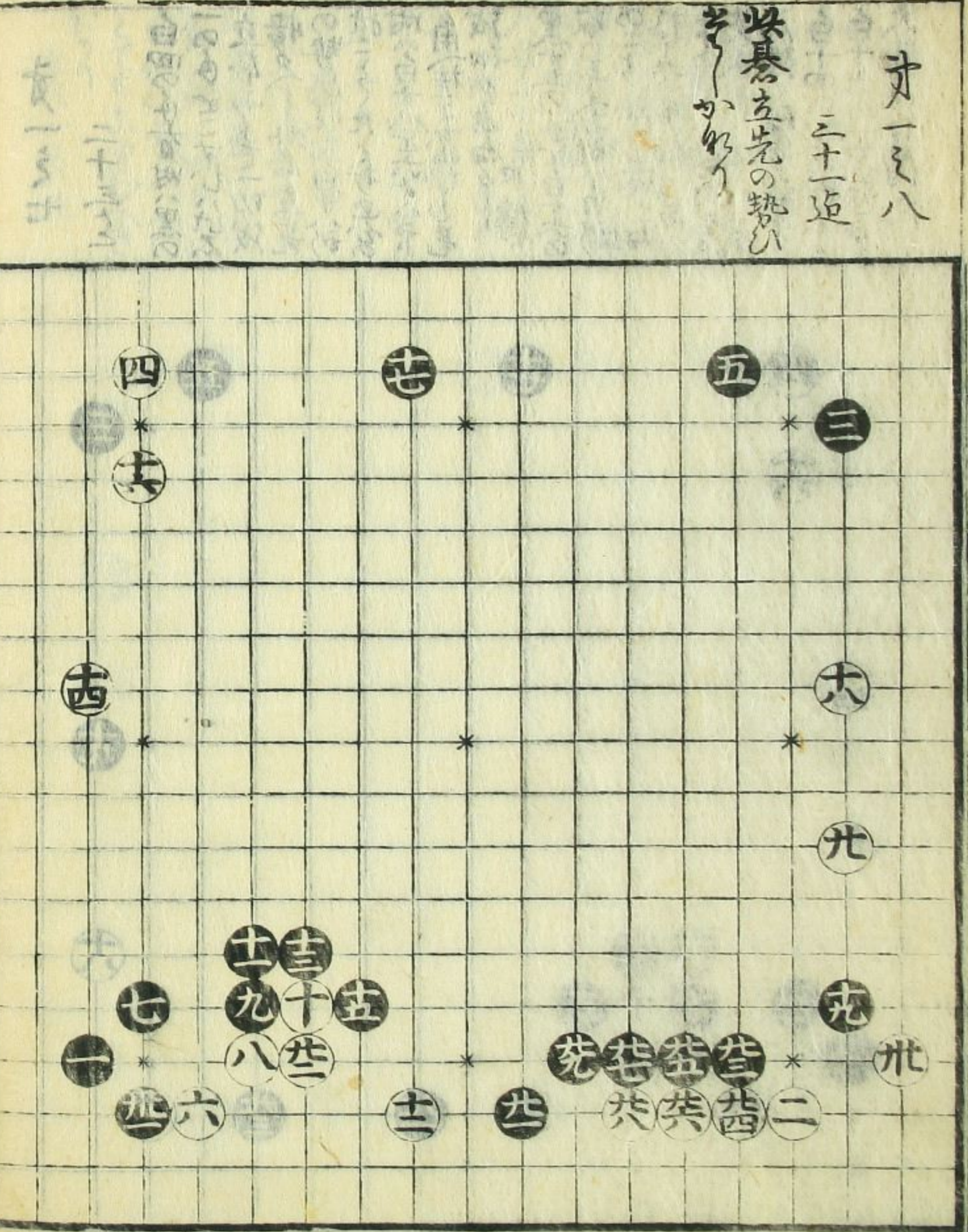
白四の才有附ハ黒の
一の才と才すしハ一を
立本ありて一切残
格りてハ此の才先
の勢ハ候ハ白十の
才とく九と打込を
附ハ白八と才ハ才
角桂ハ才ハ才ハ才
残ハ才ハ才ハ才
黒十の才ハ白十六の
才ハ才ハ才ハ才ハ
の才ハ才ハ才ハ才ハ
ハ才ハ才ハ才ハ才ハ
才ハ才ハ才ハ才ハ
先ハ才ハ才ハ才ハ
乃理ハ才ハ才ハ才ハ
白十四の才ハ黒の
白十六の才ハ才ハ
大事の才ハ才ハ



才一三八

二十一迄

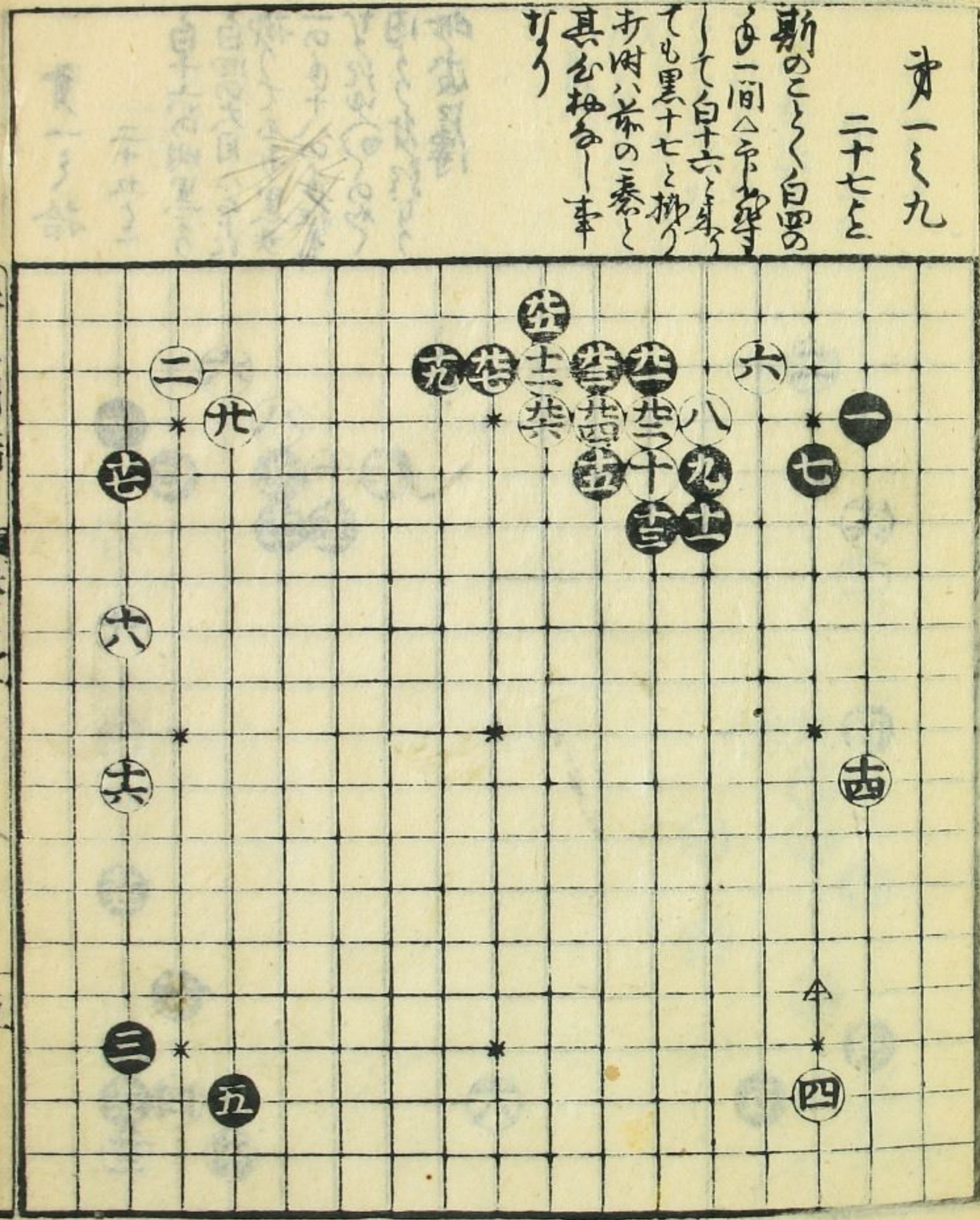
此碁立先の勢ひ
きつかり



才一三九

二十七迄

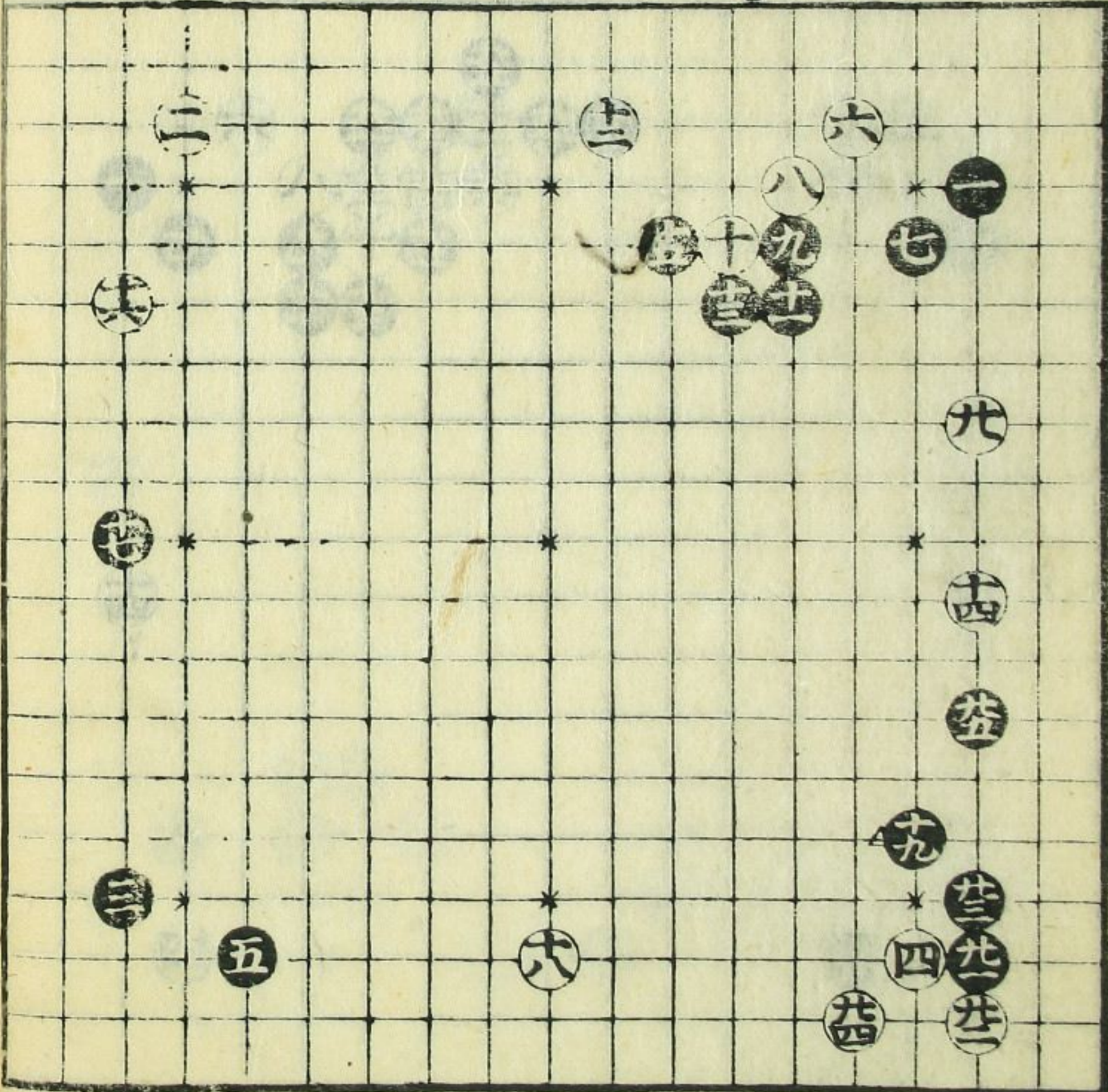
斯のこゝへ白の
石一間△を打す
して白十六と身
ても黒十七と拂
打附ハ碁の素と
其を相る一事
なり



才一と拾

二十五と

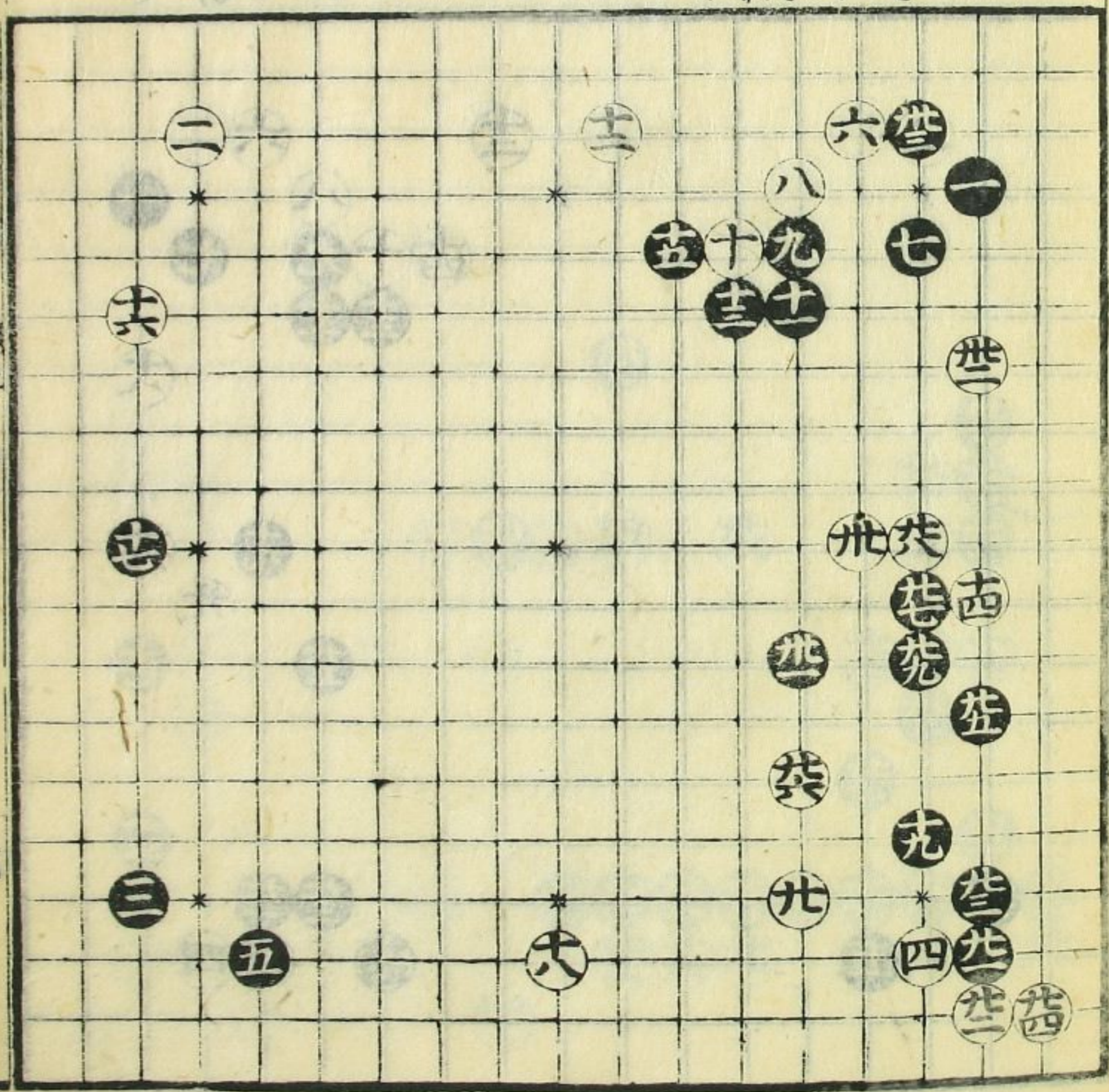
白十六の兩里より
白四の六目△字に
掛つてもオ黒女
一の四十八の○征
リ此の○の○の○
因より分るる
此處は傳



才一と十一

二十三と

茶の碁に
二十れ
少
怪
残
去

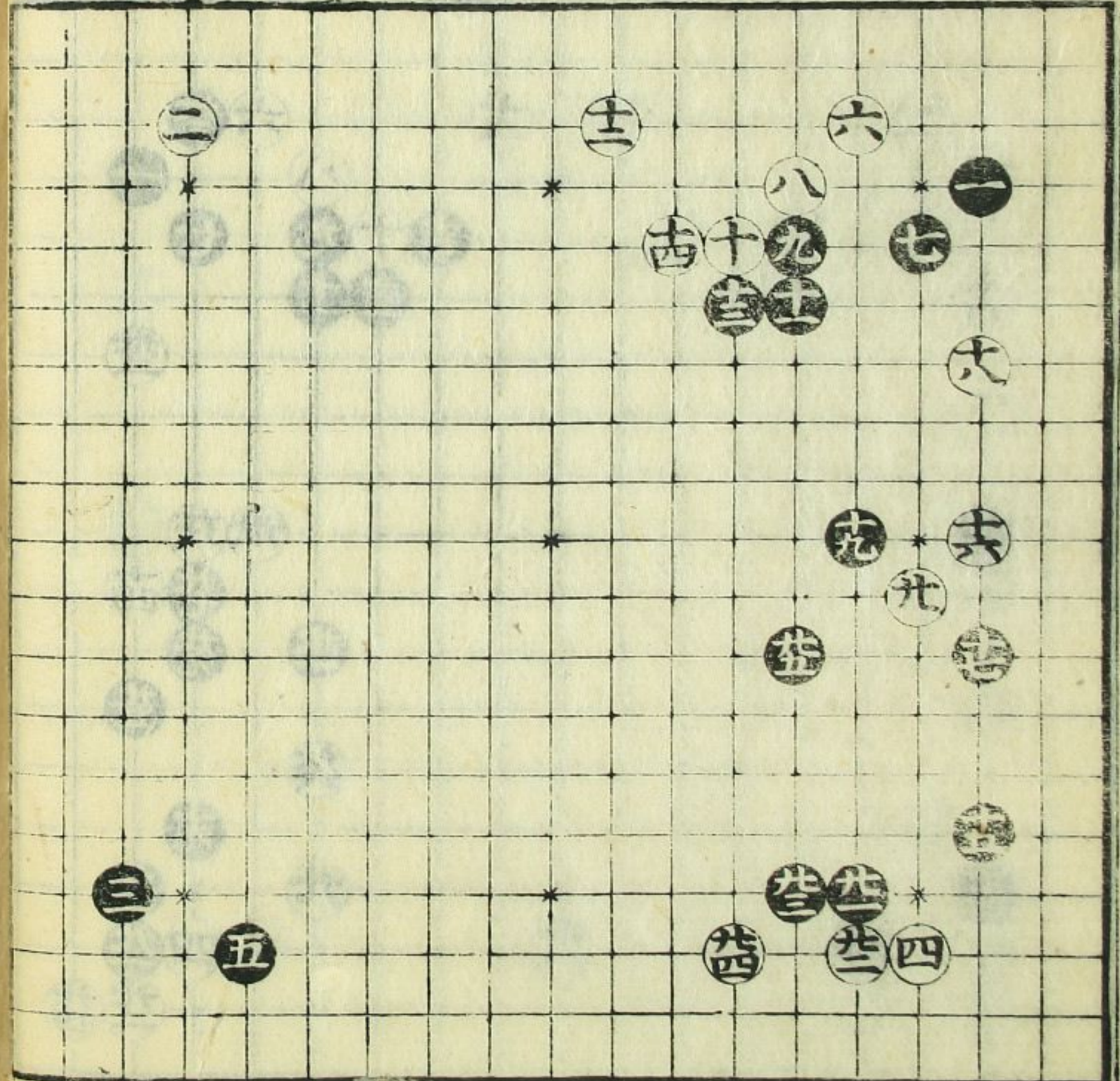


五
六

才一十三

二十五まで

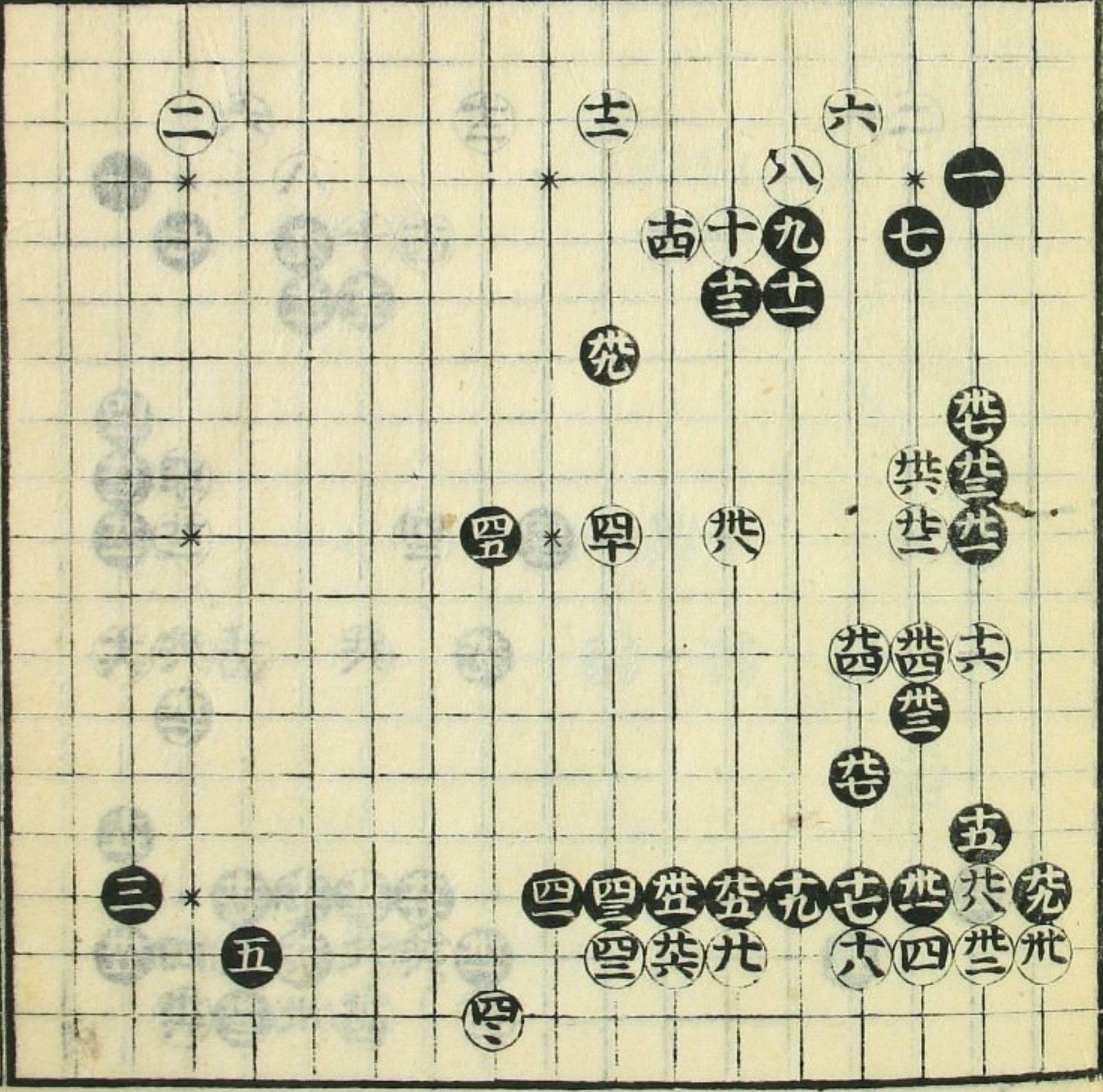
以石左黒先の
勢ひきくも也



才一十三

四十五まで

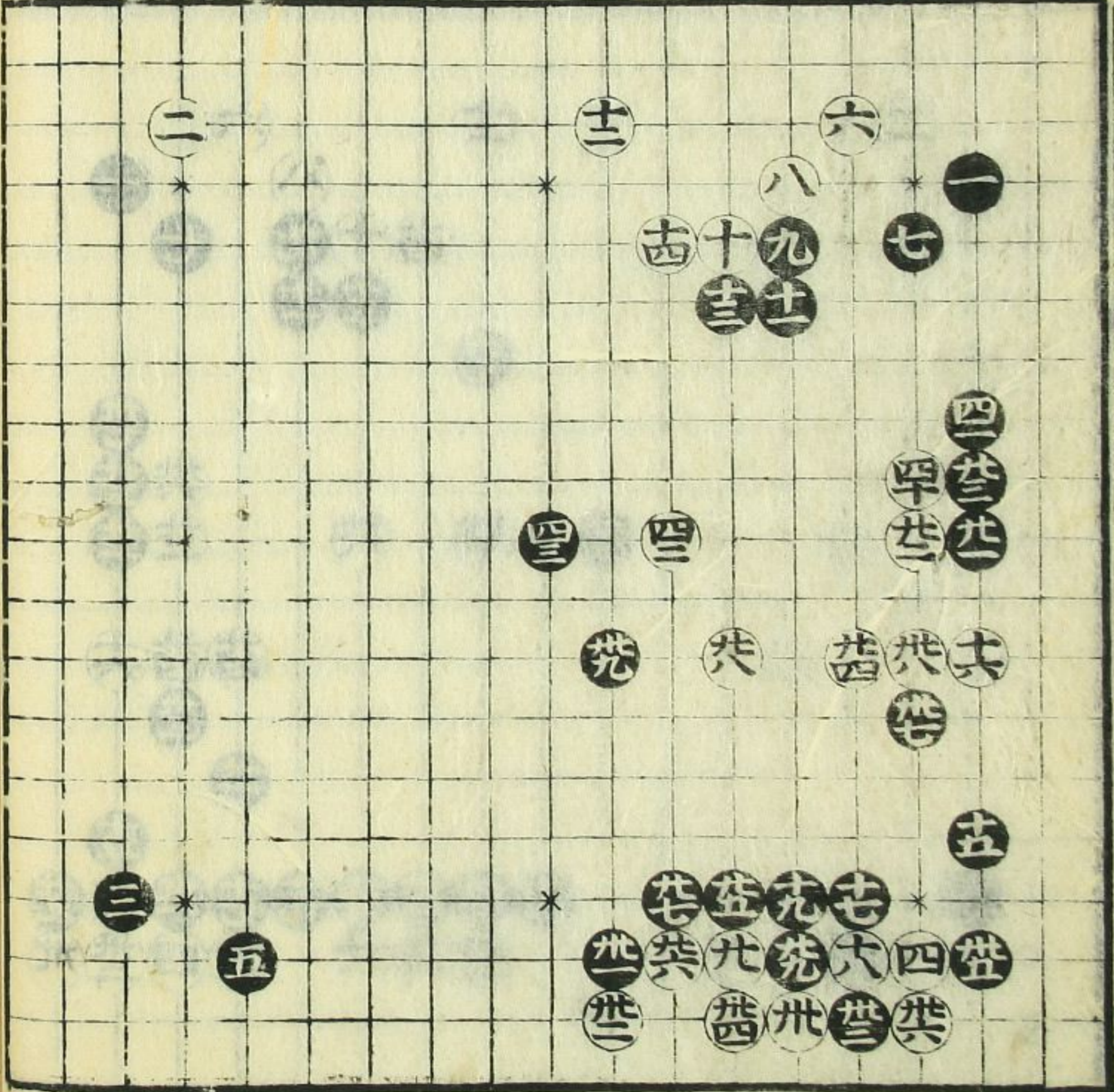
此石左先勢ハ
リク白廿二の
黒ハ先手す
大く打つは
黒廿二の先
時ハ九の先
位ハ大なる
リク白廿二
十段桂チカ
内出ルマキ
黒四十五の
為合ハ一
この一ハ



才一と十四

四十二と

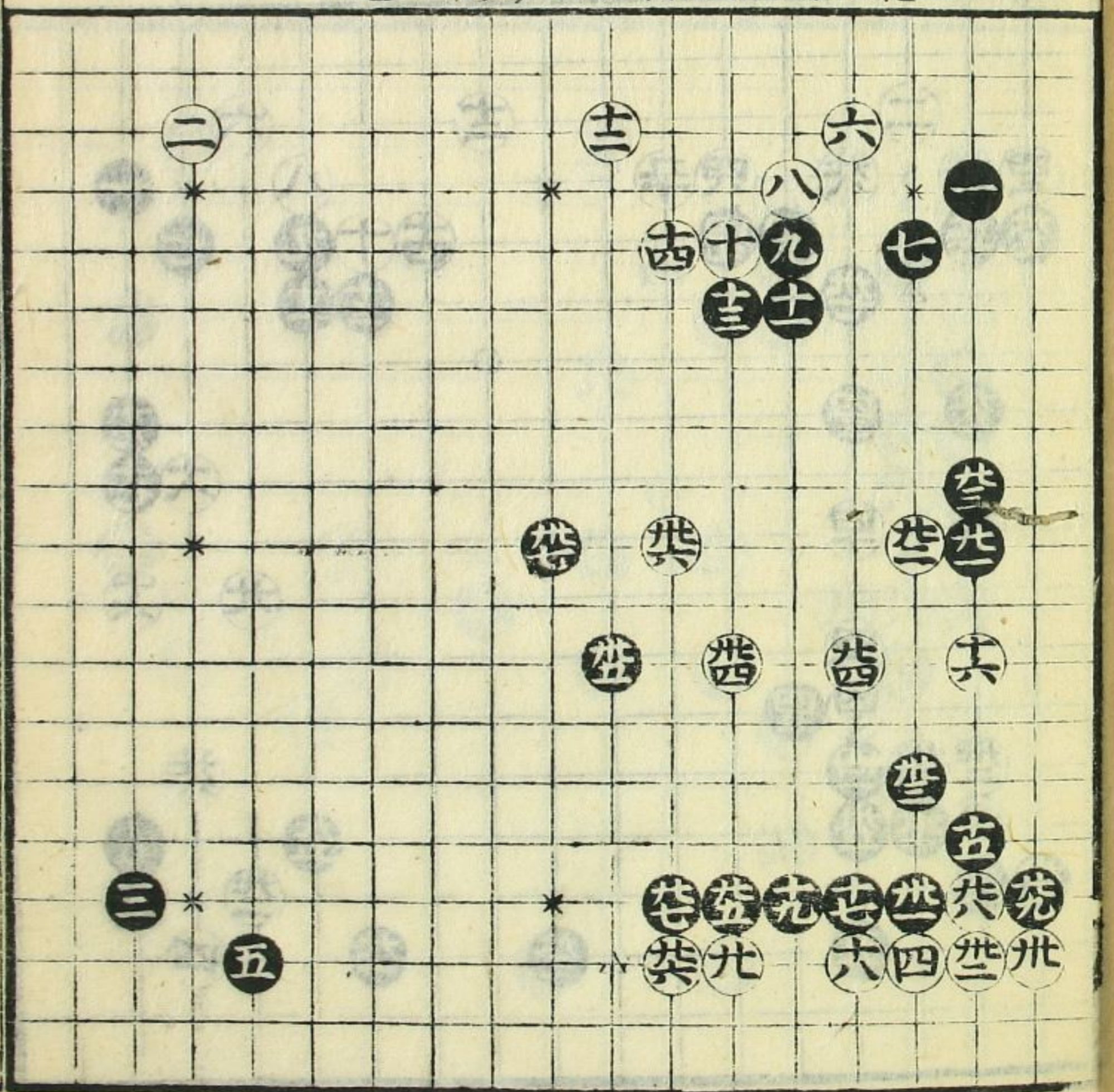
此石五一の物の
合黒方を力ま
りれてぬるる
其なり



才一と十五

三十七と

此石五先勢ひ
なりぬるる
此六七と
ありの才一と
なり
黒七の白六
の白分て切る
辺
黒五の白△
ての白を
られ三十五の
白のゆへ白よ

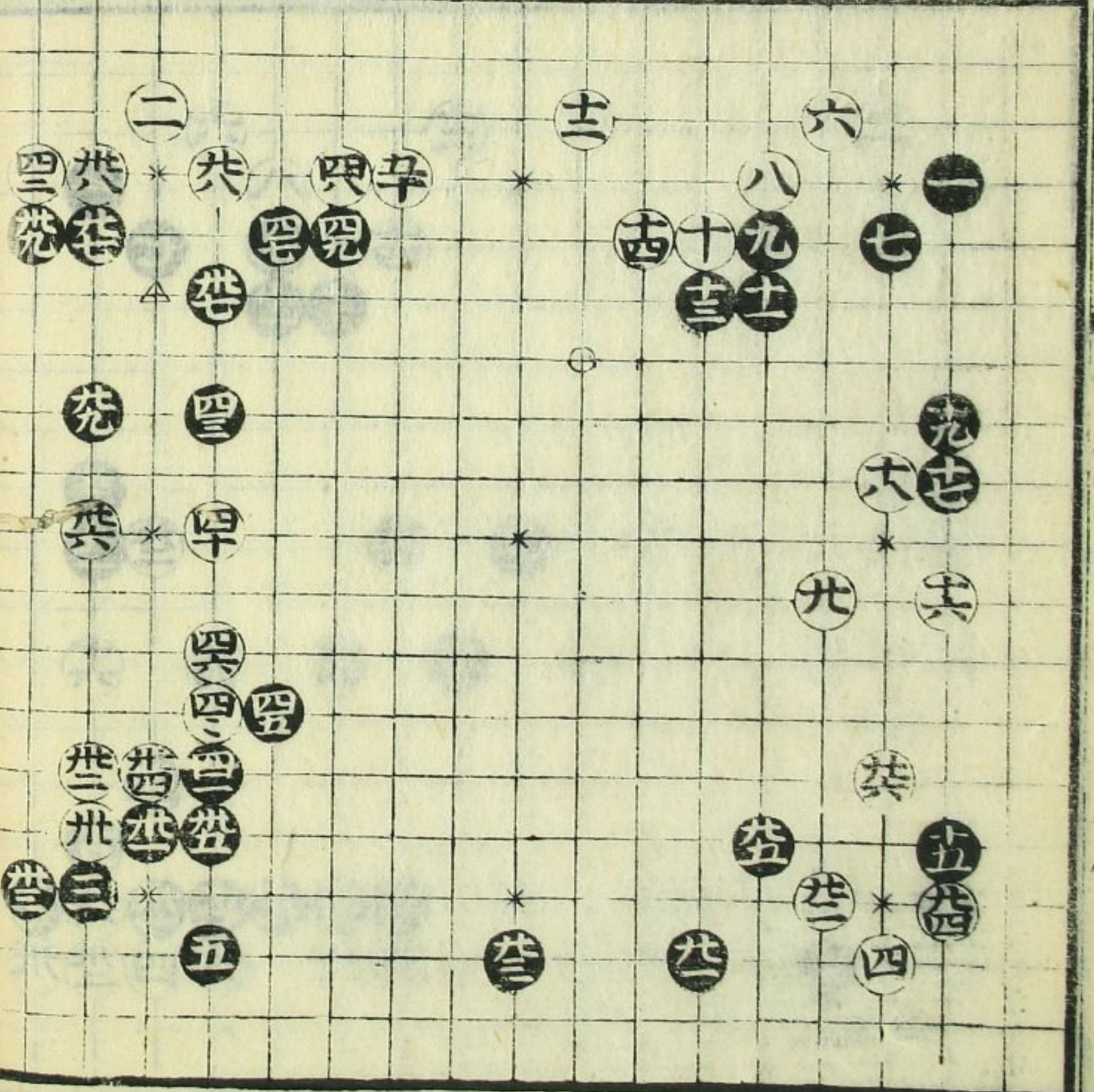


書立指詰

才一と十六

五十通

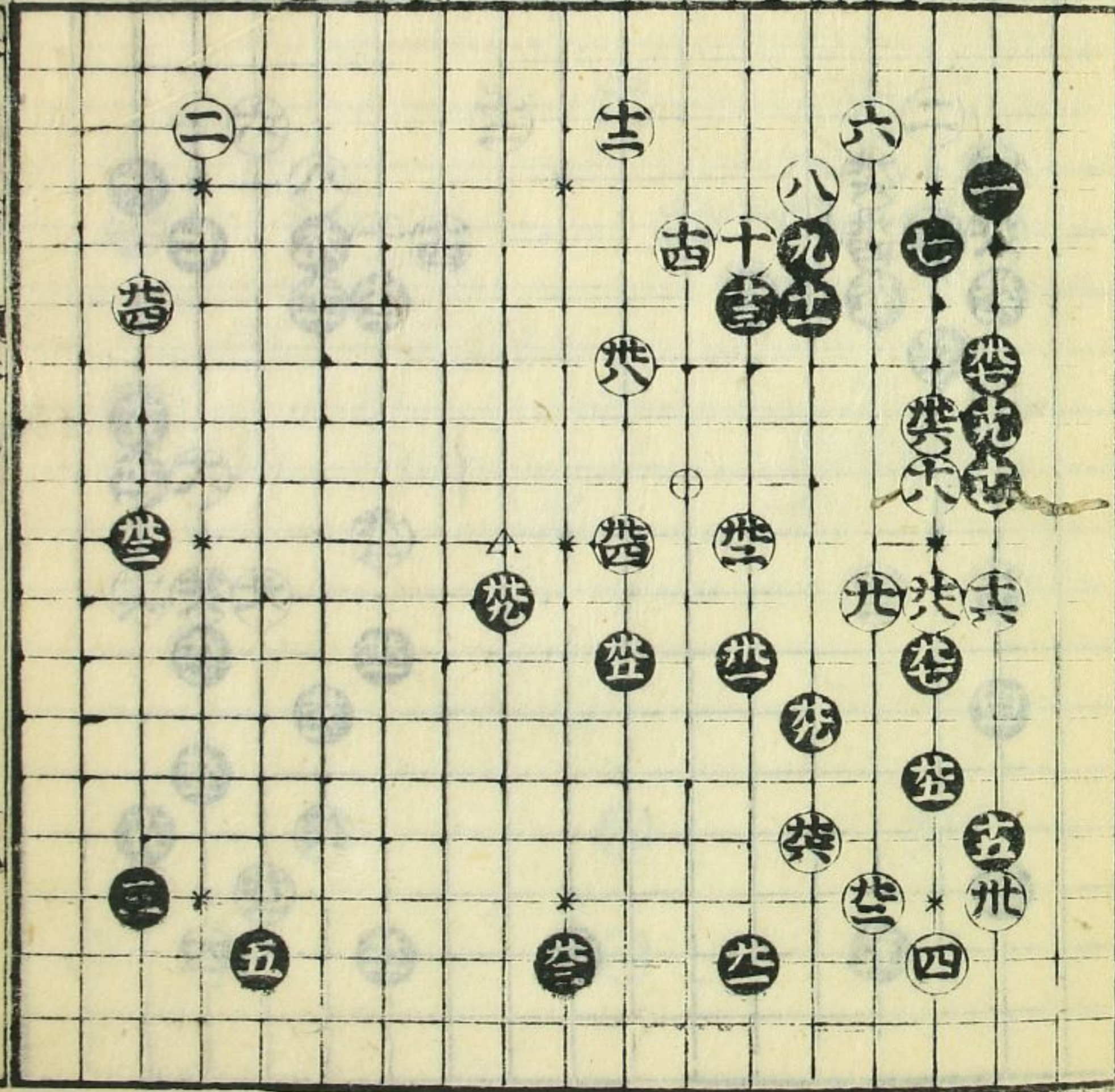
は右左先勢ひ怪
けりか道は春ま
て一畝の地龍力を
入く才一か打墓之
白此の身と黒の北
七△才一守りて定
源のまゝく白大位
打ても黒十三の身
小桂○才一に打中
先のつたはひた
りて見ゆなり



才一と十七

三十九と

此ろく先勢ひ
怪く三間投の白
強くはこれ黒
要るなり又白の
一畝の位と消する
此ろく有り黒三十
九の身一畝の約合
めては才一か打
大才一にかと合地
白此八の身と四の
中一△才一守り
又十三の黒と才一
へのとれは其
如くなり

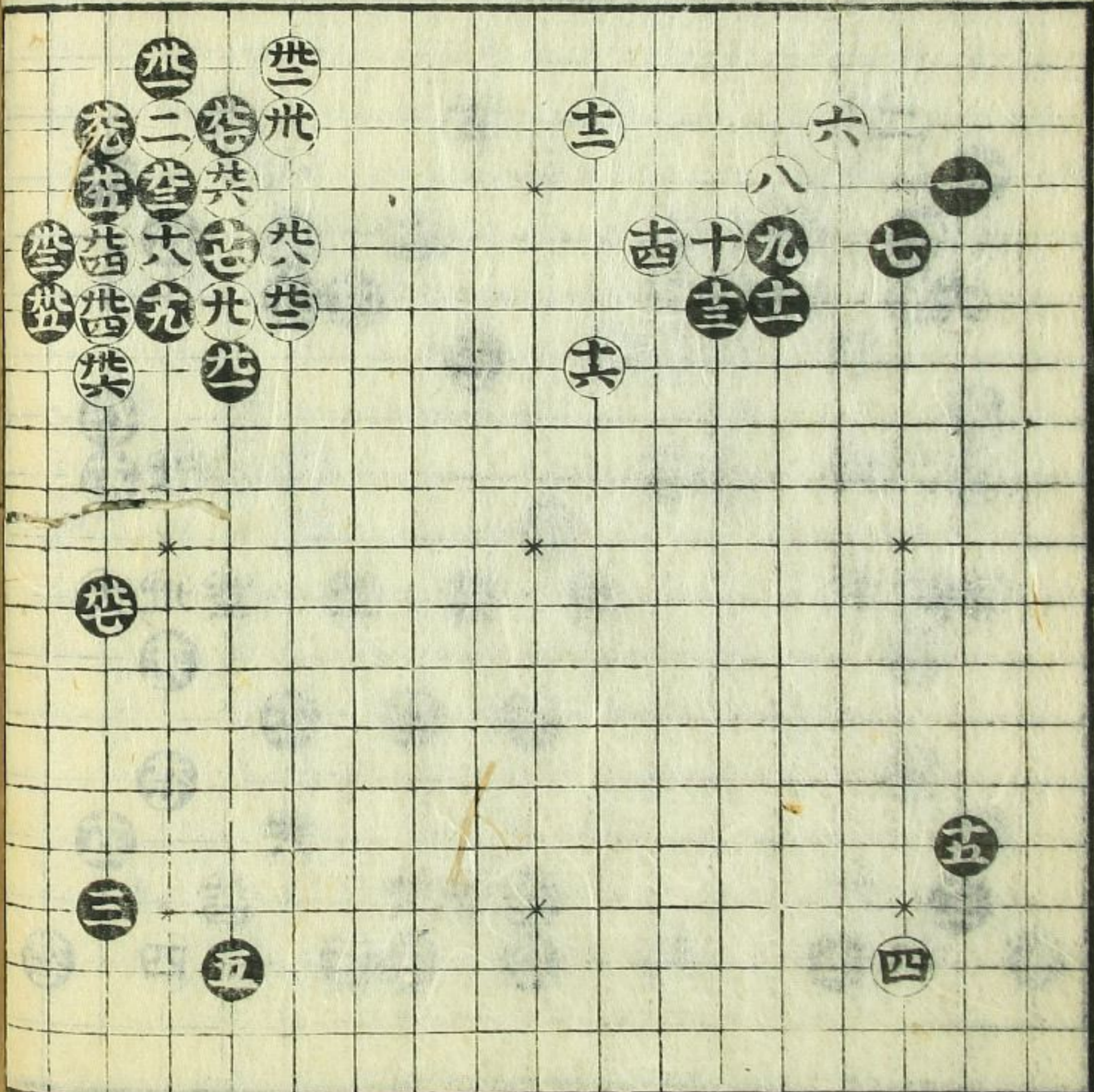


書九片帝

才一と廿二

三十七まで

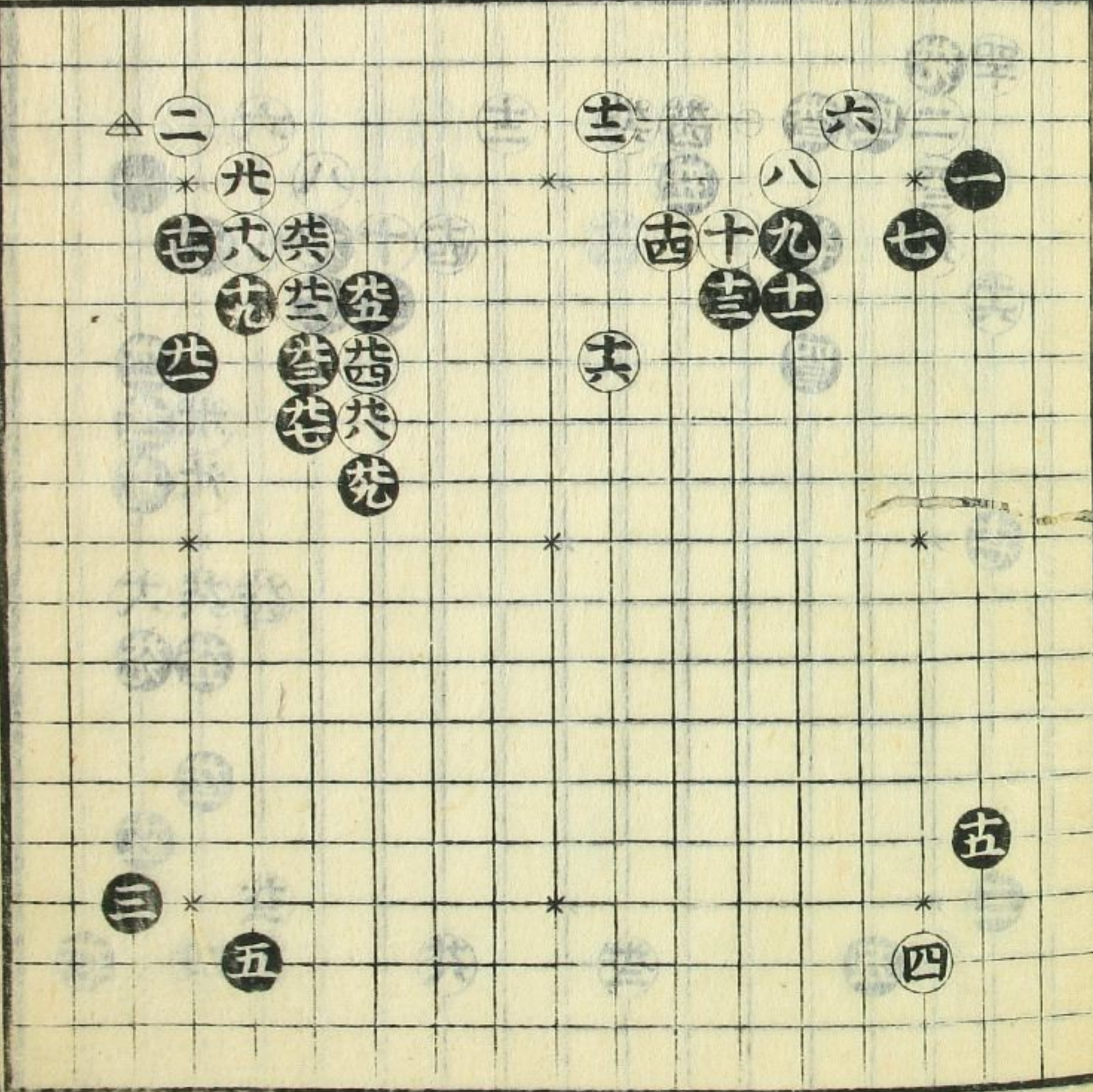
此石を先置せては
白面を以てゆく
黒をこひ能白十
八の石断のこく
付て切れたる



才一と廿三

二十九まで

黒十七と赤のこく
御れ八のよやく
白打の筋を
終るなり黒
ゆよはるは切れ
何のなり其入
白二の下△黒
打て打の白切有
指の角もあ
りよ黒黒
先置せては石を
残すきなり



才一と廿三
三十七まで

才一と女四

四十三と

先勢は怪し黒女
九の白は白二の目
下は折れ筋のこ
らん車上は黒女
五の白の女は
黒の女三の車分れ
は黒を押し白切れ
女六の二折は白
さめは黒をきり

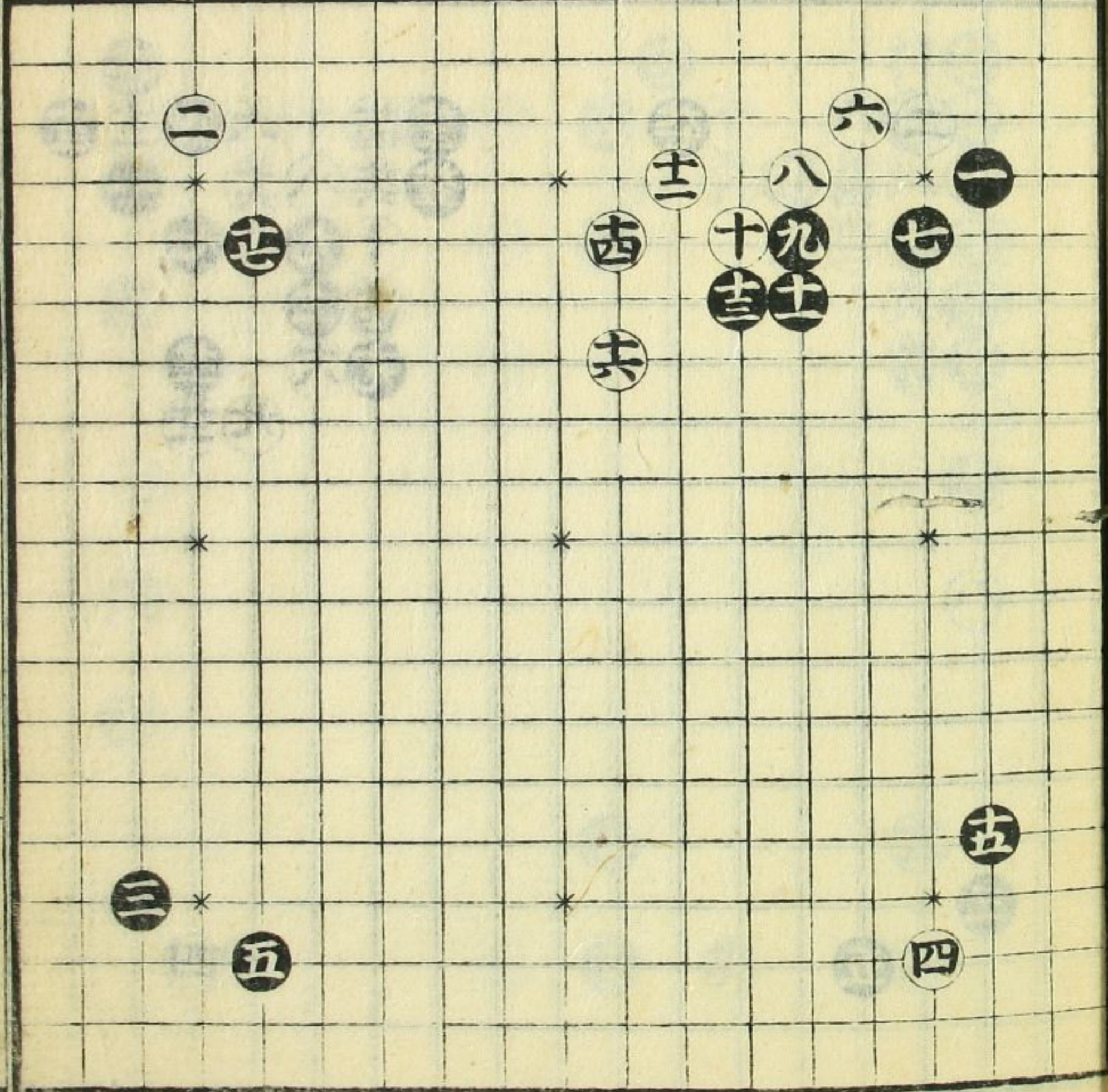
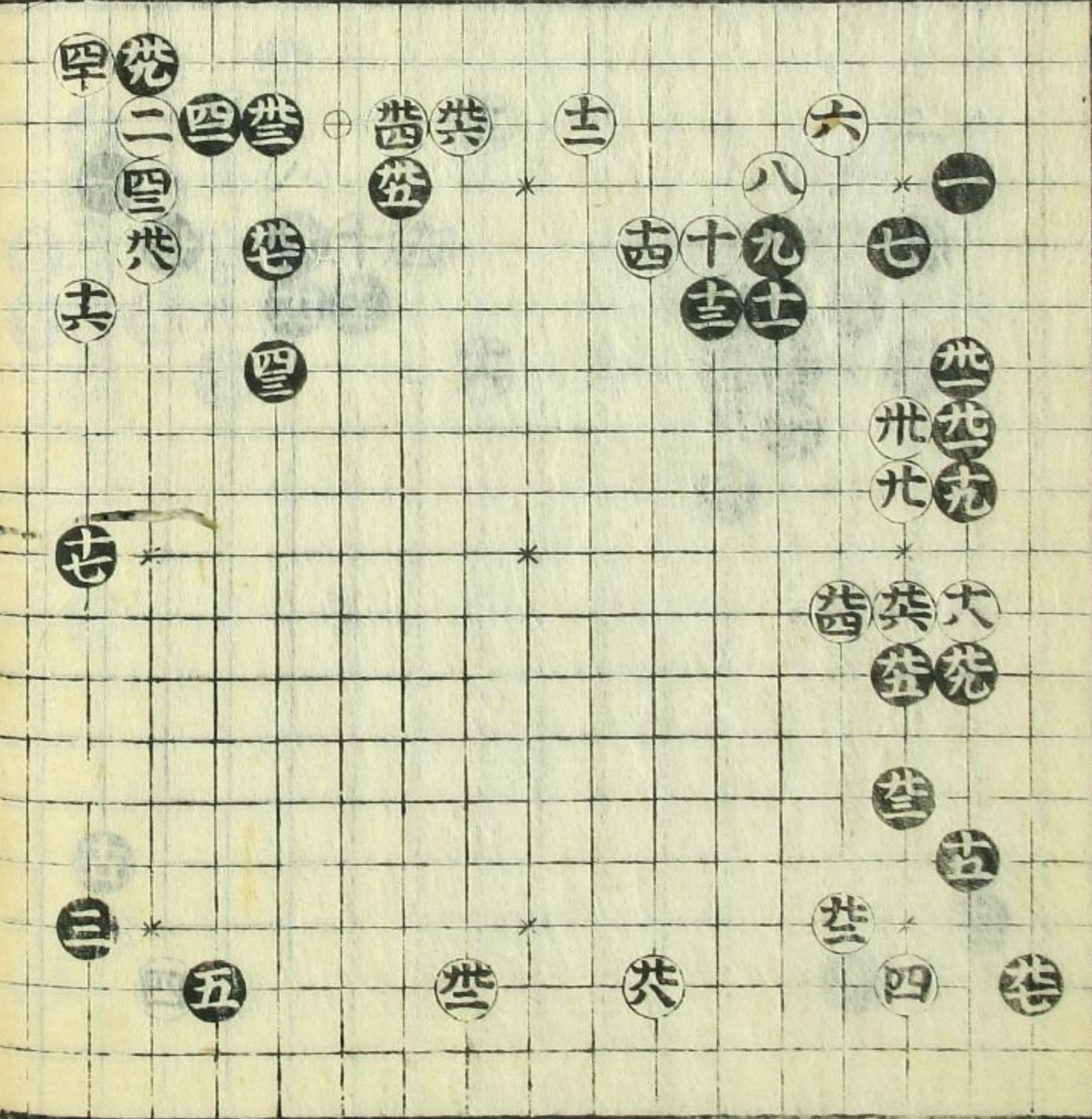
才一と女五
十七と

才一と女五

十七と

黒十七の女筋の
まはる折筋の碁
は白に其を
一と事なり

碁立綱目 卷之二



才一之廿六

二十七と

此石を白損なり
あぐれとも位の入
基なり

才二之十一

二十七と

黒十一の石あり
あぐれとも位の入
基なり

三

五十一

五七

六六

八九十六

三三

三三

六

二

三

六三

九

四

五

三

八

十

三

一

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

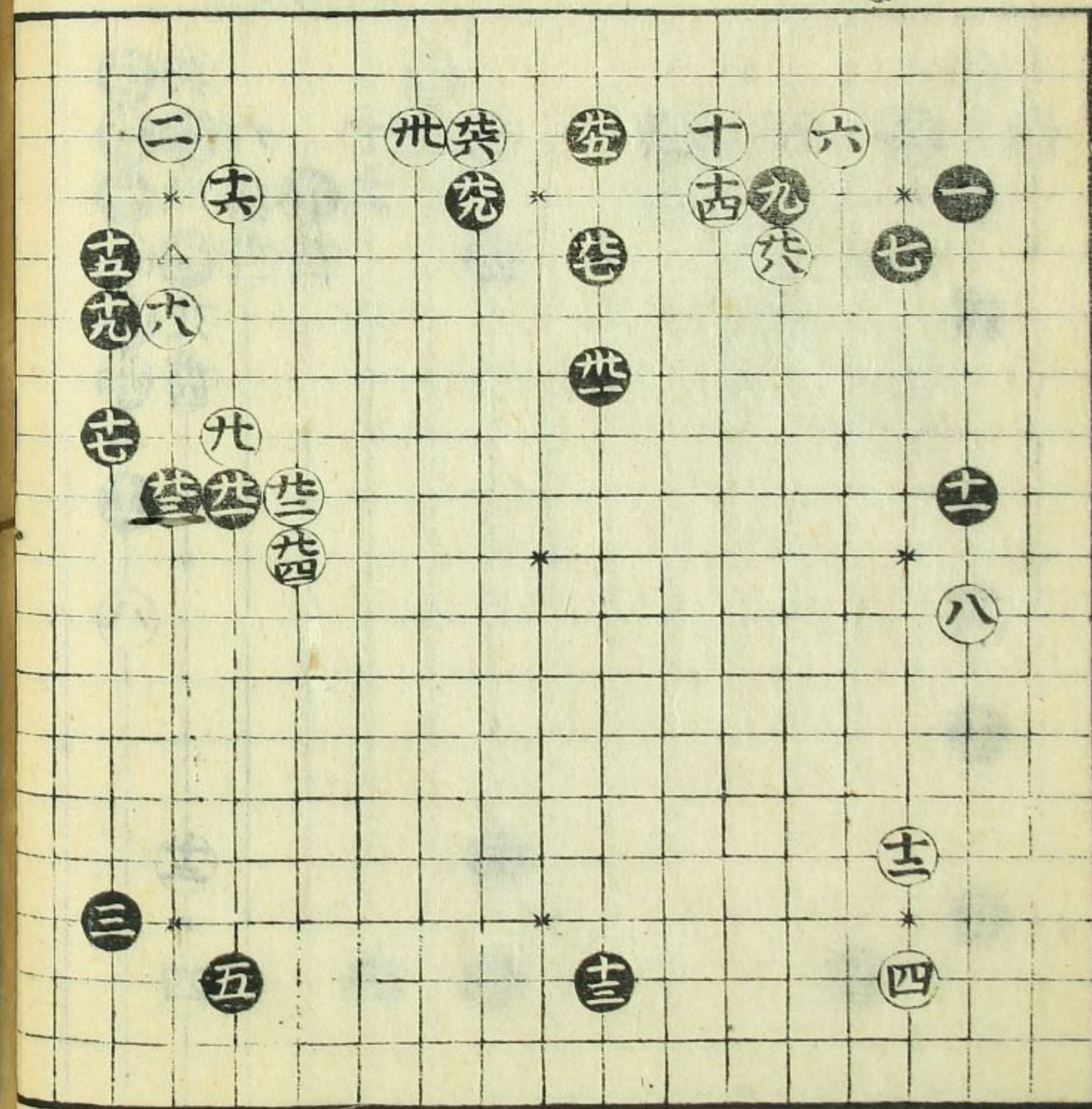
三

三

才二と二

二十まで

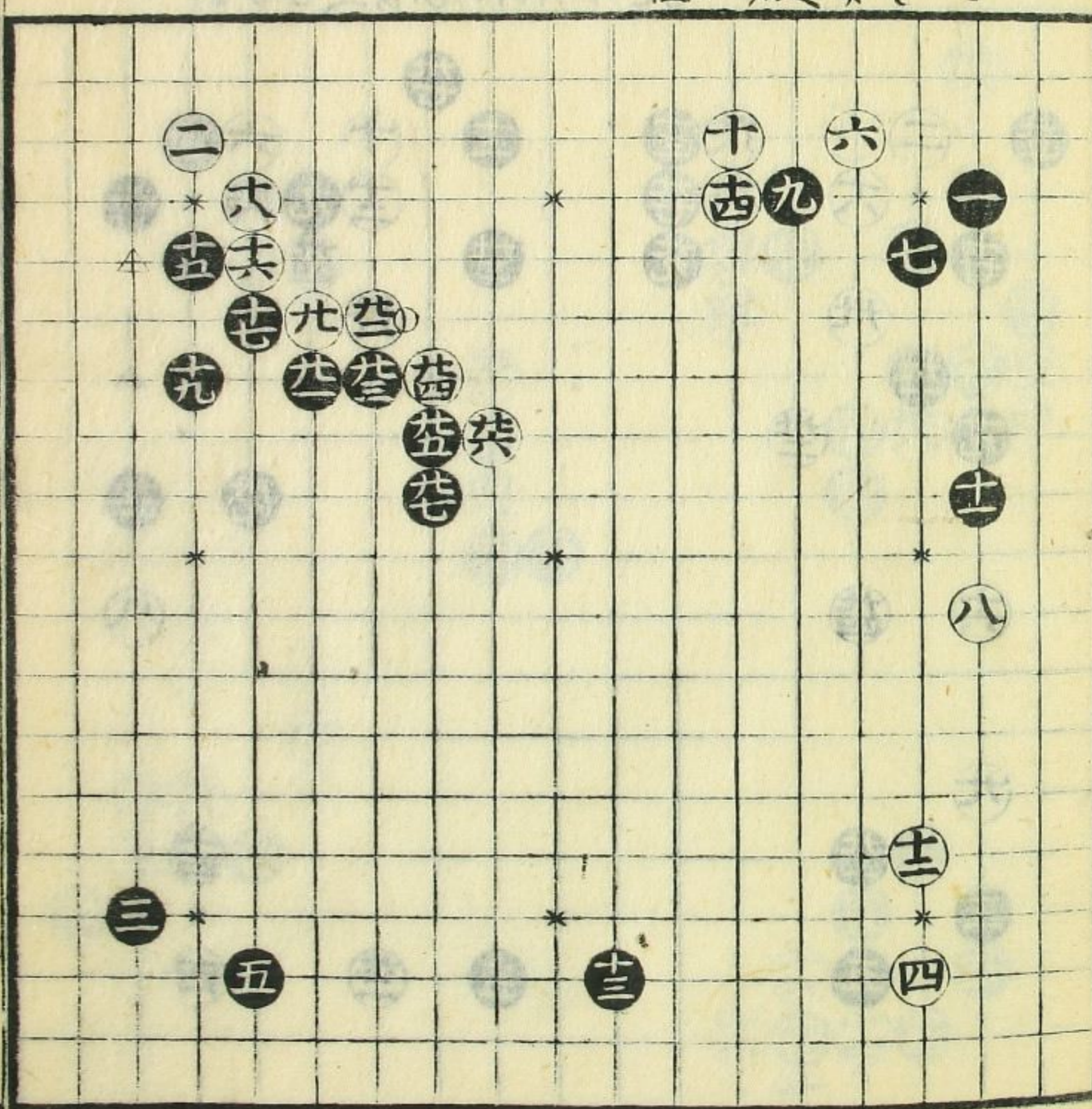
黒十五のひま月
△印打もよく



才二と三

二十七まで

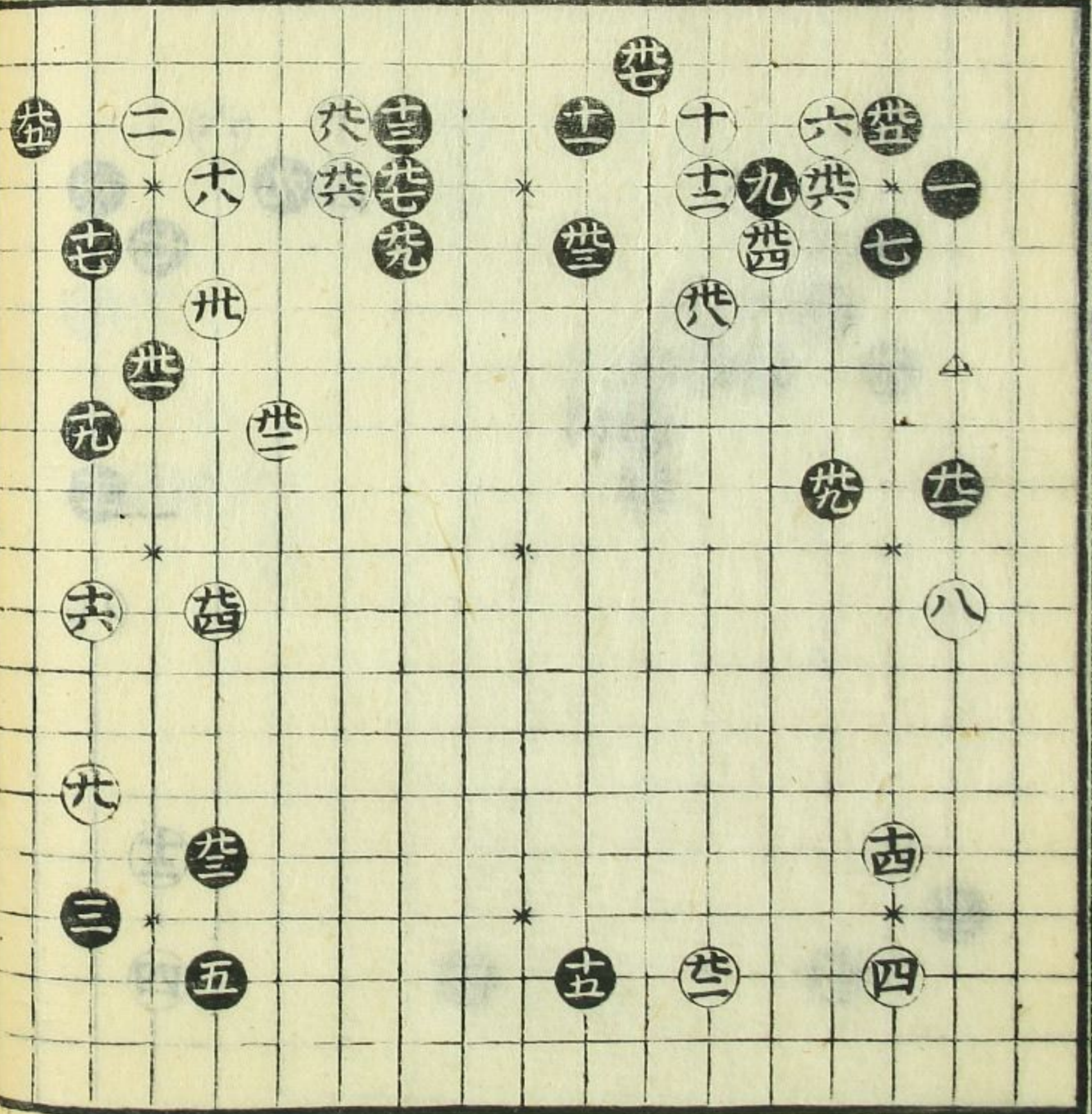
新のこちくにてそ
先の勢ひ怪し具
のひ黒の十五まで
付さつても白は
二の折の定黒
ふふふ二の位の
ふ



才二之四

二十九と

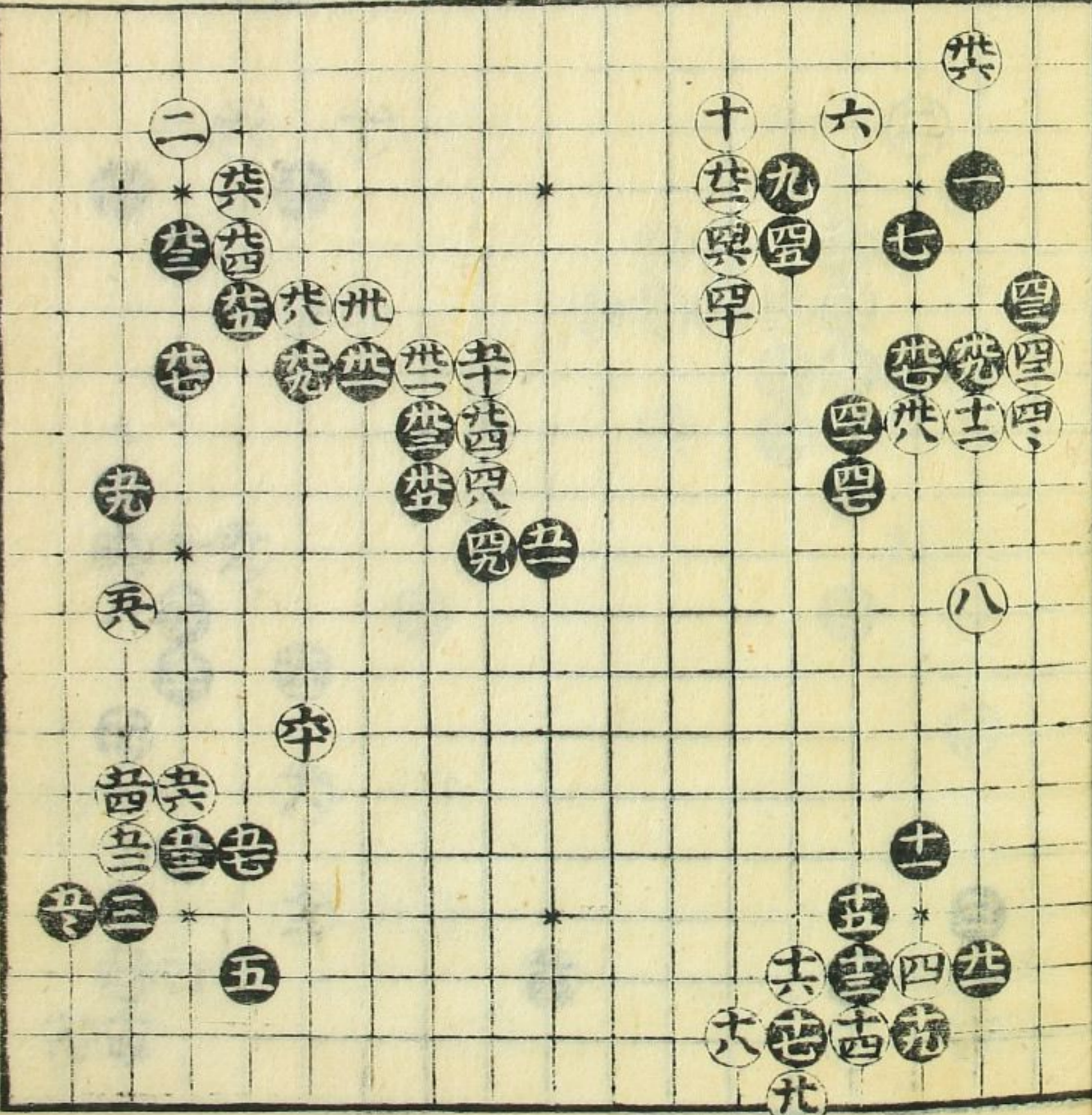
先勢ひはなかり
のこころ小位おも
角を白世八の公
折也公少黒世女
白せりて二間探
黒あめぐて
白世四の
も云又位の



才二之五

六十と

黒十一日目と早く
のこころおも白
の方角(桂)は
少小断の
の位修りて
かろう先並せて
本は白後向有
かり黒十一の時十二
二間探りて
の
置
り



棋立編
卷之

十一

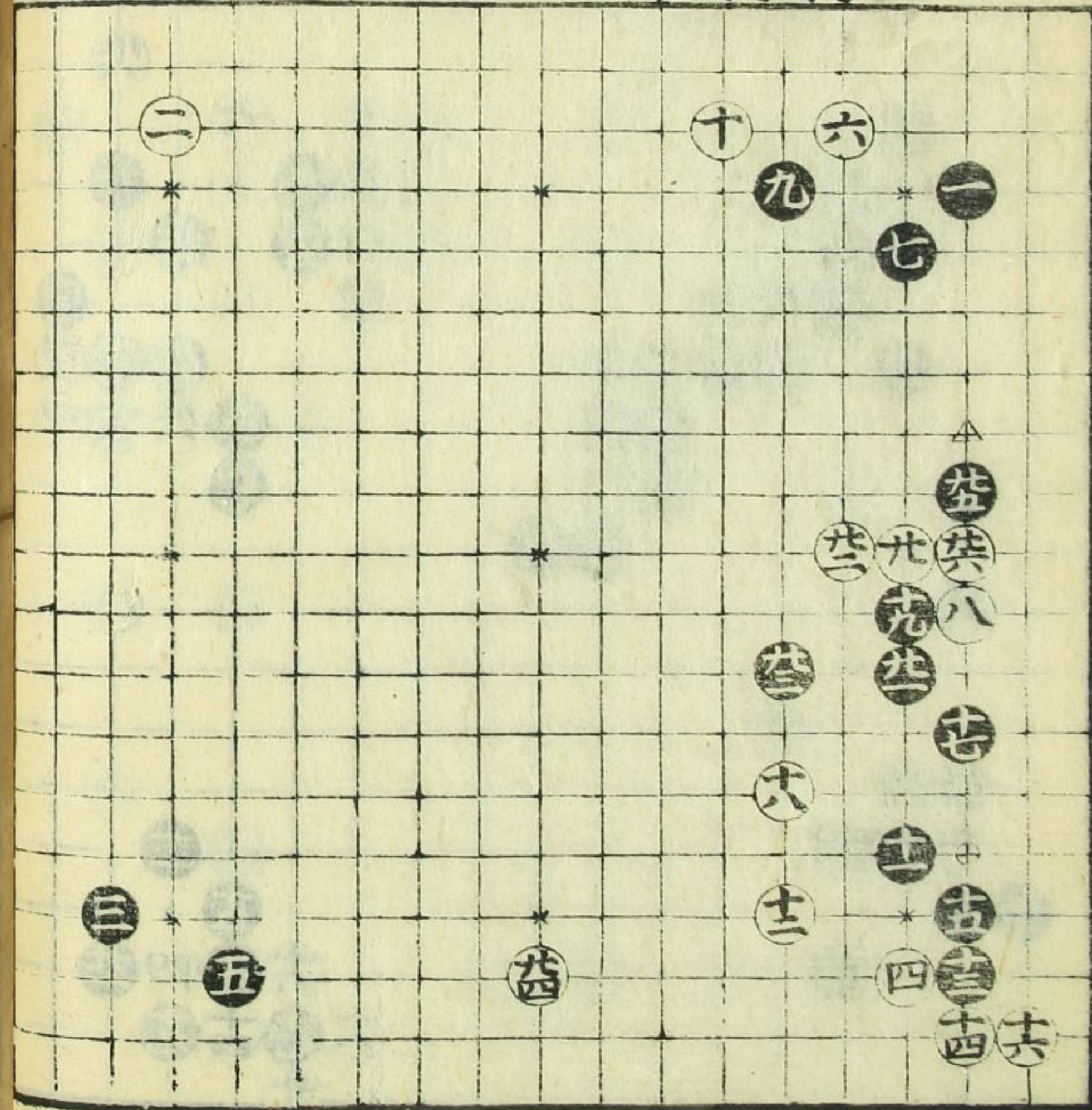
棋立編

卷之

才二之六

二十六と

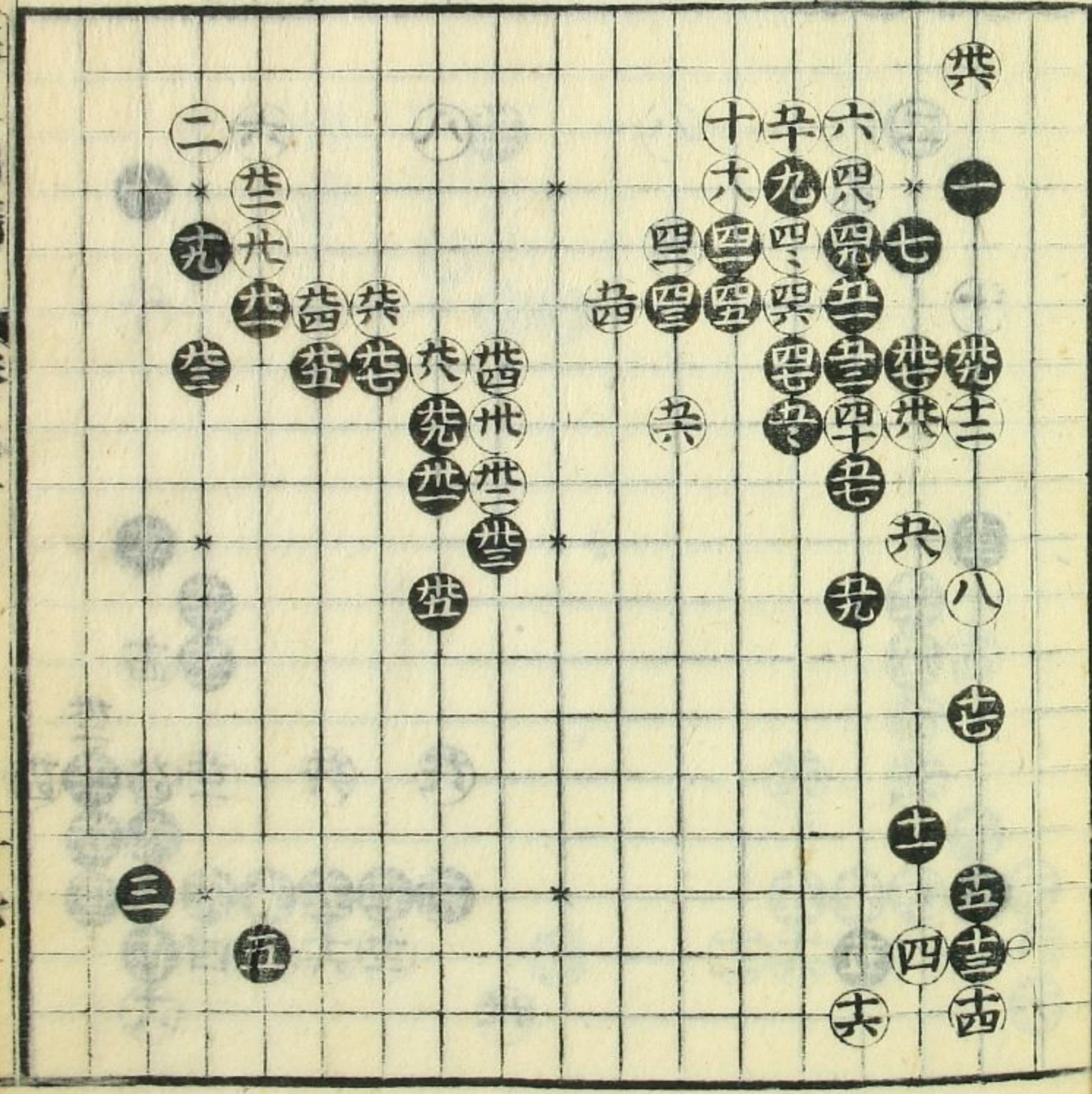
白の八より△を三
向に引いて早く白
十二の△を附黒両
方めよりて悪差の
白の黒十一の下△を
赤せて赤もめり
るれり



才二之七

二十九と

黒十三の△を赤
引いて定法はこれ
より一筋の挿れよ
り白の黒十七の
所へ引く時よりの
赤せ見合す事
なり



五十二
黒九の所へ粘

Handwritten notes in the left margin, including the number 52 and a reference to the black stone 9 position.

Vertical text on the left edge of the page, possibly a page number or chapter reference.

才二之八

三十五

白十四の打止む時
黒の打止む有り
一歩の掃指は傍
見合を有(三)なり
野のゆくは(八)黒よ
白十四の子(五)中
押して(六)きなり

才二之九
三十七

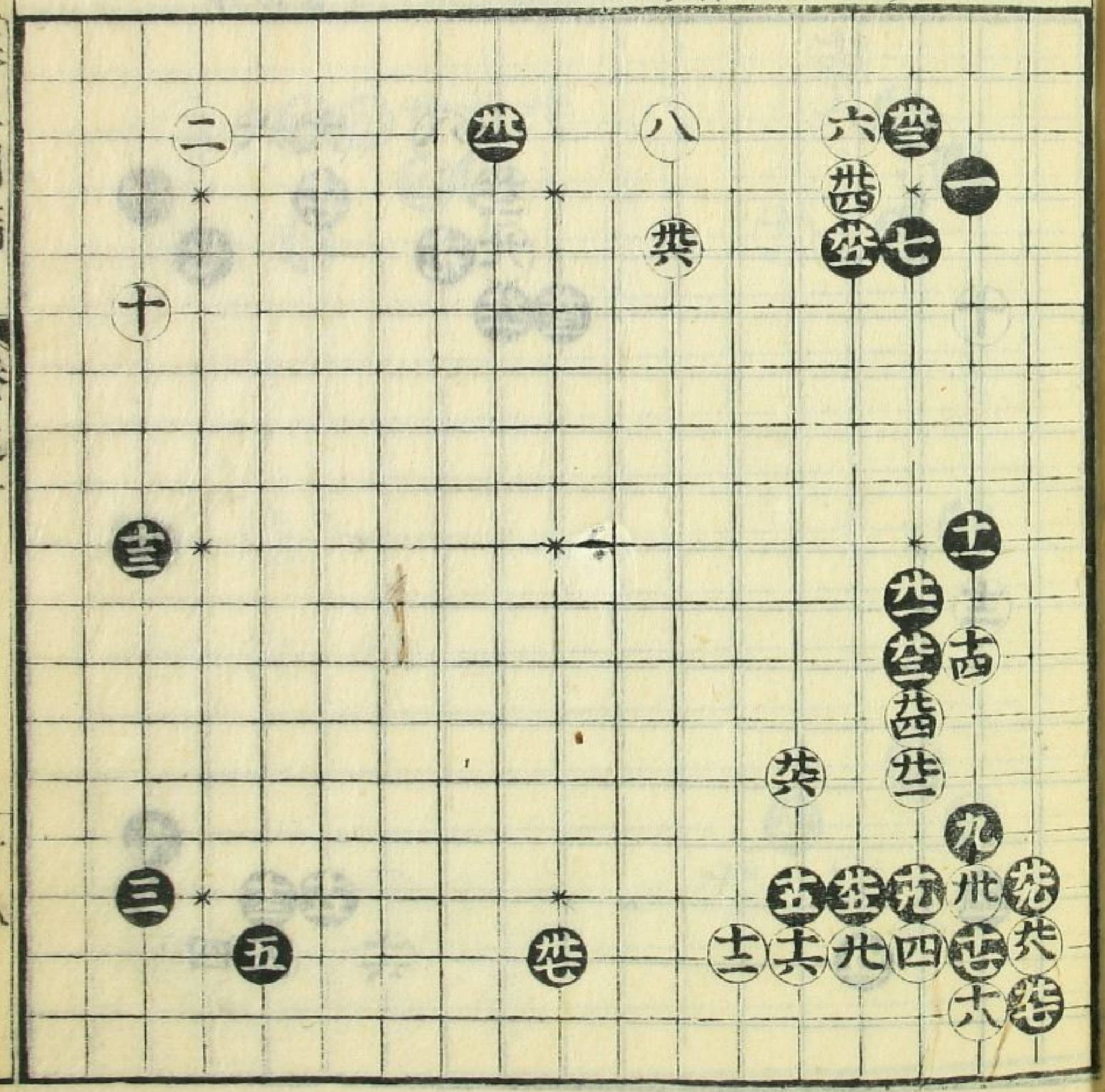
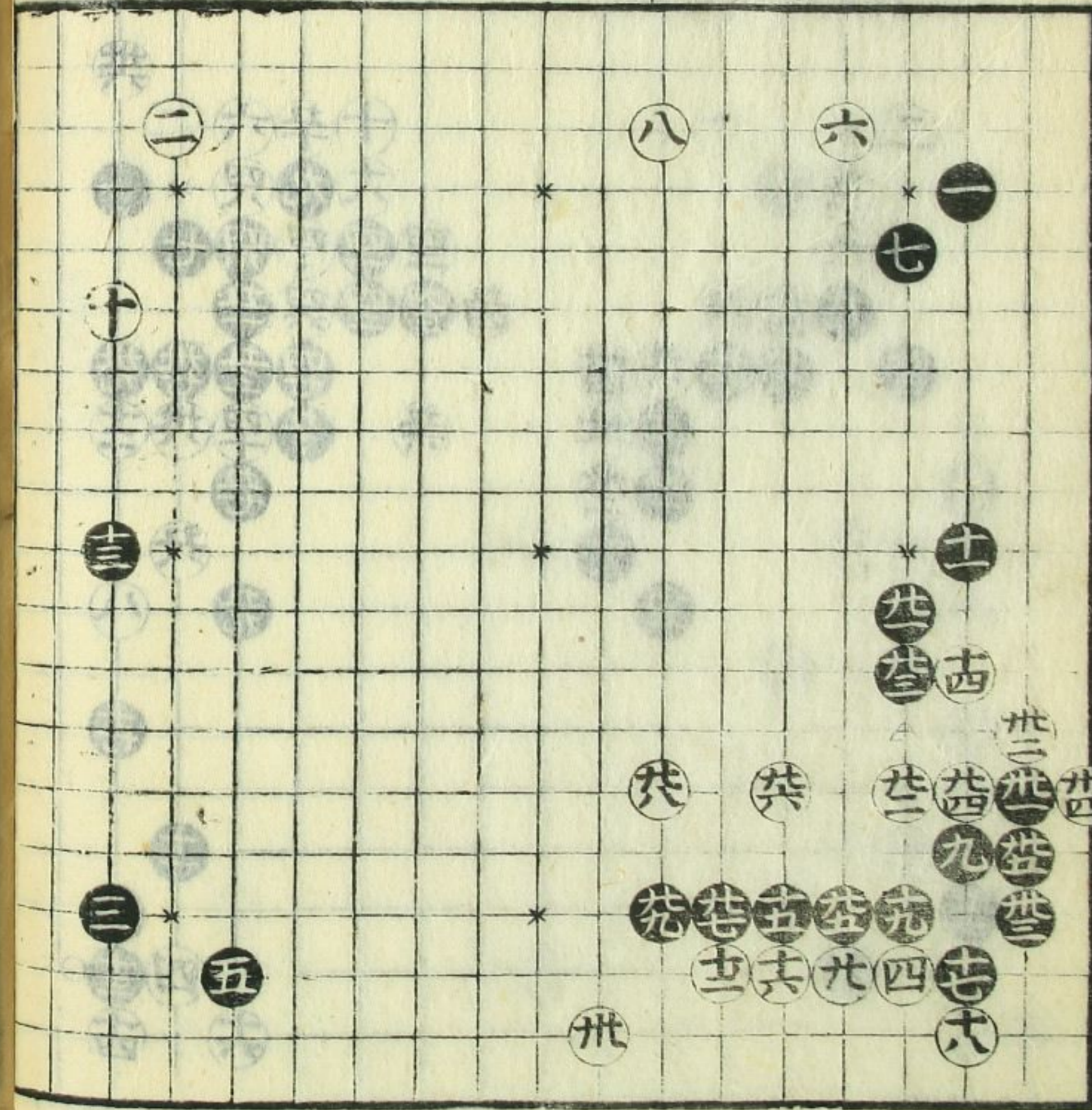
才二之九

三十七

先手は(八)黒より
野のゆくは(八)黒も
有り黒の(六)七初
(六)八(七)の(八)
一歩(一)只(五)中
此有(五)黒(五)初

三十二
十七の打止

棋立續篇
卷之七

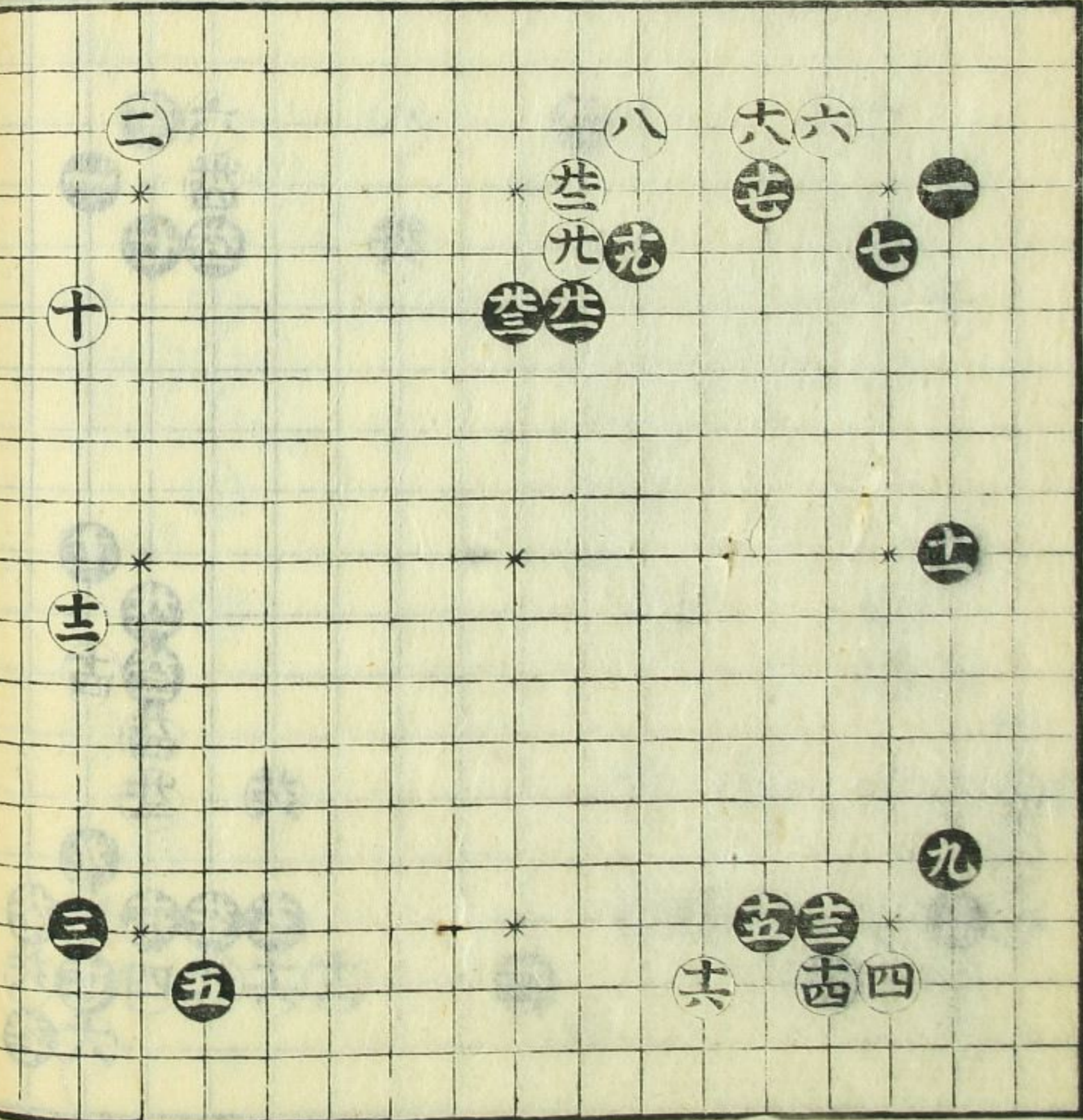


棋立續篇
卷之七

才二と拾

二十三と

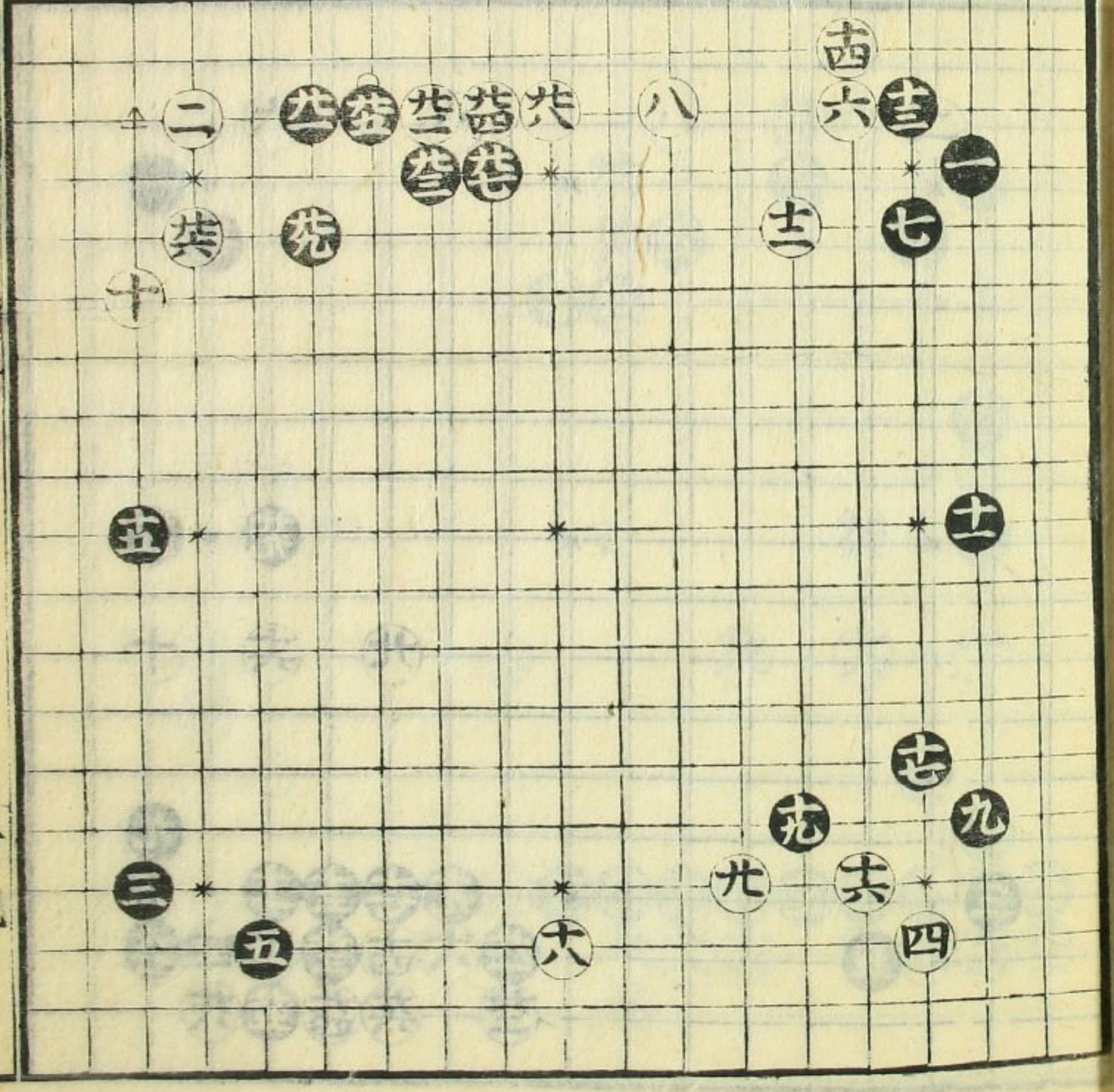
亦新の夫とく白十
二と歩を此石形の
ゆく黒大位まする
友向の傍りゆり也



才二と十一

二十九と

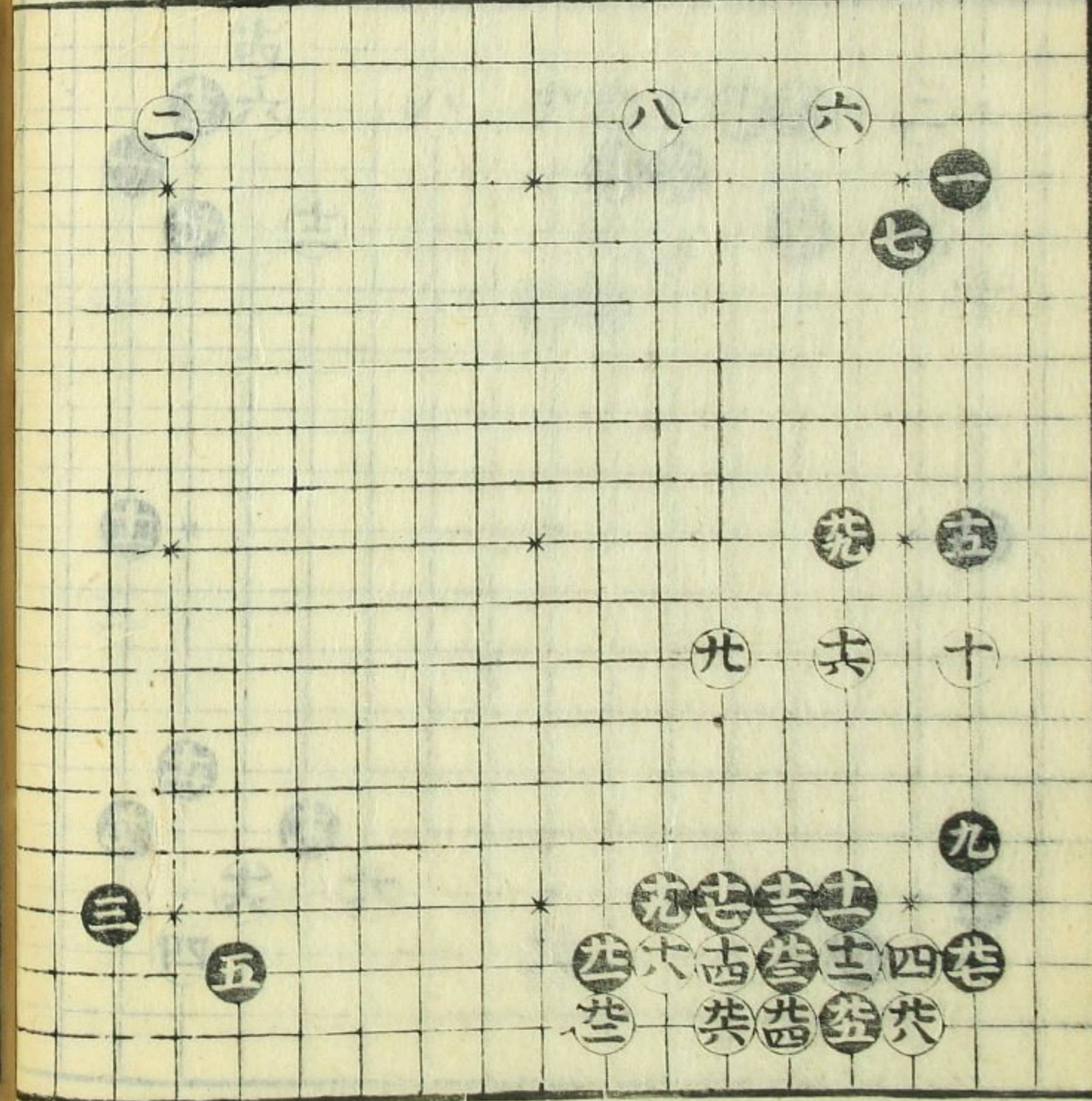
此石を白十六の夫
すも歩を此石形の
ゆく黒大位まする
友向の傍りゆり也
白の○より尚ほ切
るは黒よりして白二
の内へ歩を白の
白の黒廿五の二歩へ
歩をゆりゆくをゆり
ゆりゆり



才二と十二

二十九と

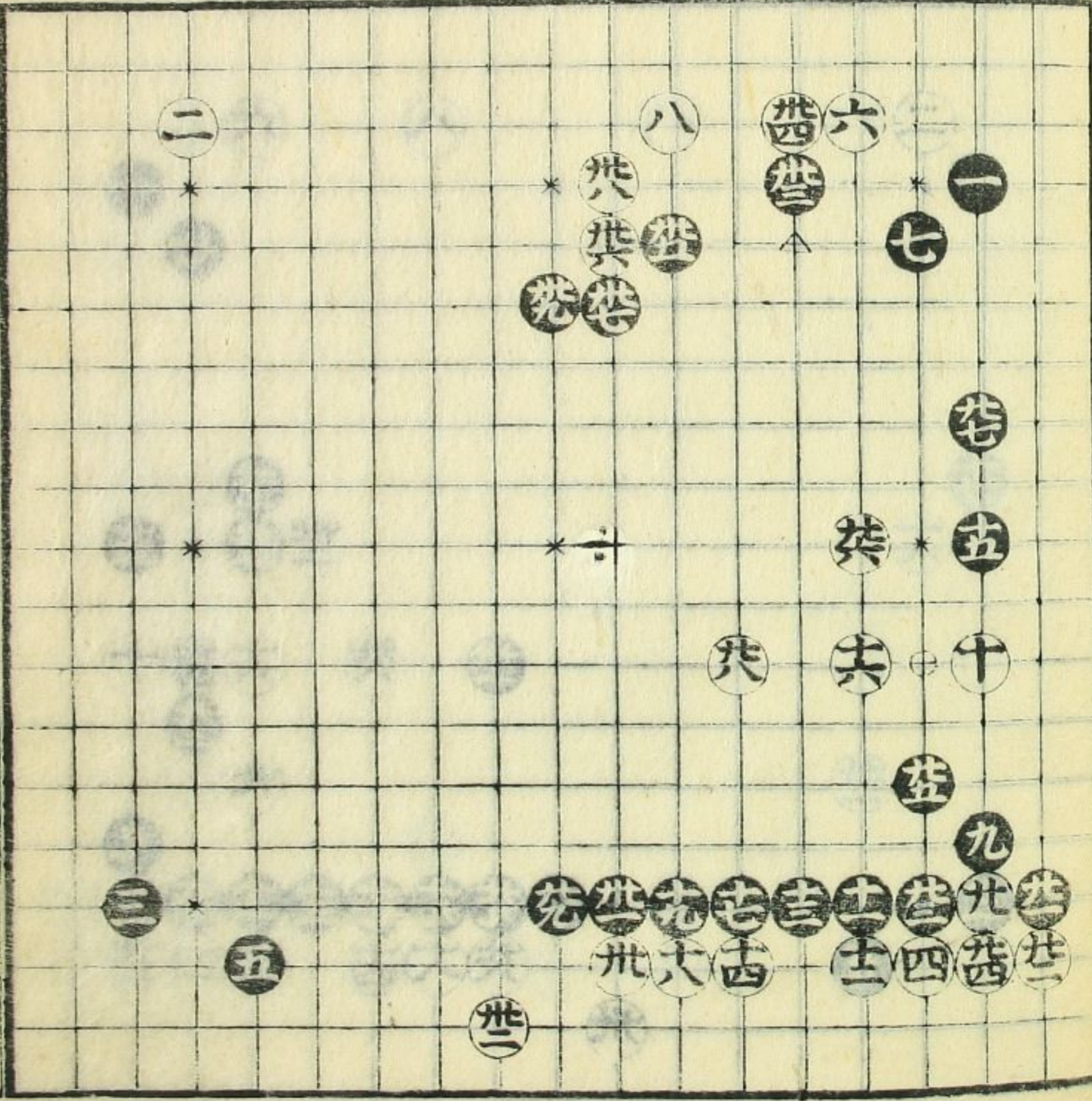
白十の附黒十一中
宗十五と校む事
白の八と手ぬは二面
部小由上下里落
牙有る由其む中
大に手ぬと遠の海
目切のこころけり
ては黒先をせしむ
ふれぬてせしむ



才二と十三

二十九と

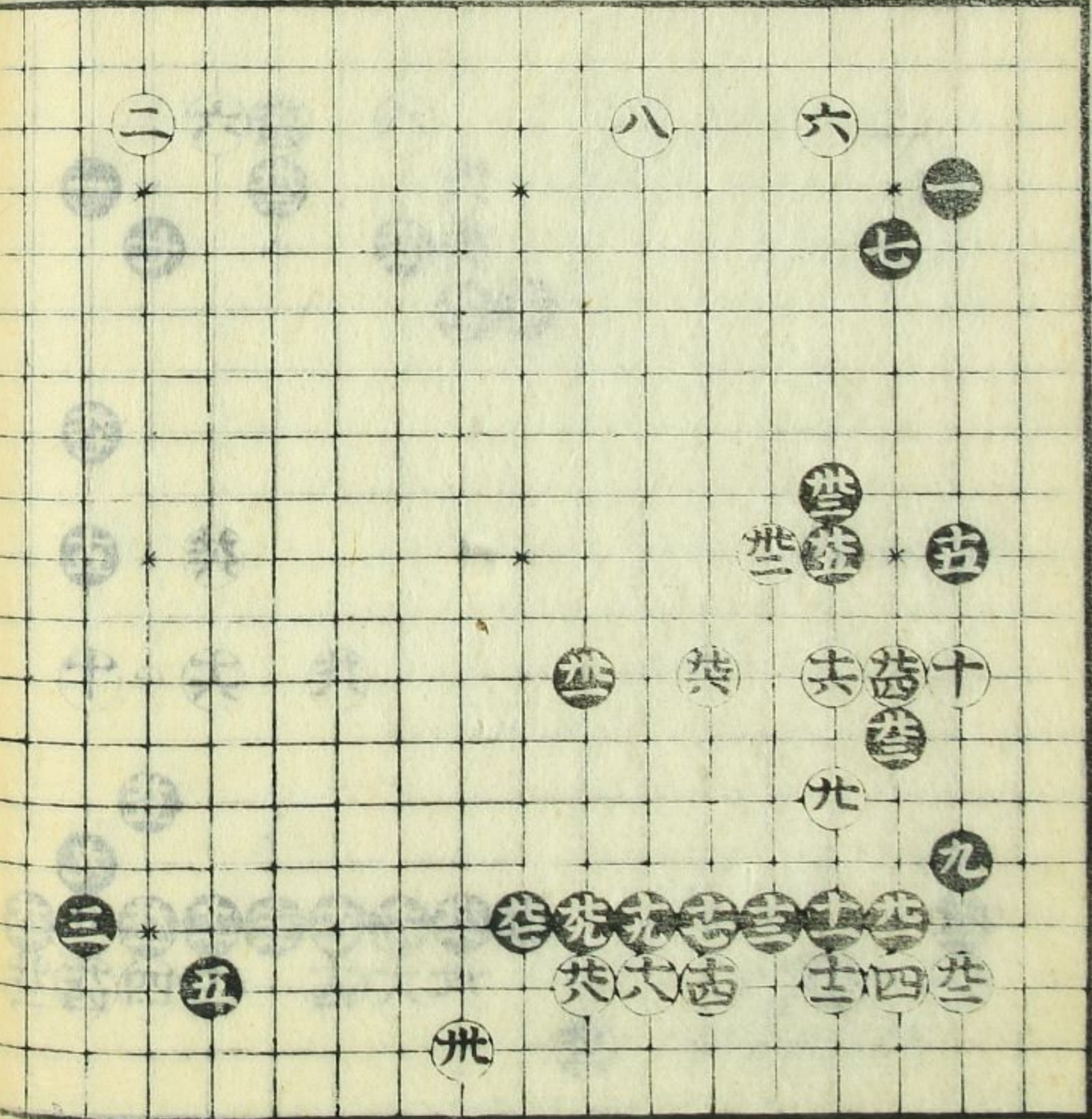
黒廿九ぬるまやう
にて移すのめやう
折る白三十のま
十二と桂は廿九
内は白三十の桂
のまは白三十の桂
△市に折附は黒を
押入白は延三の五間
目○市は折事先
垂るは折事先



方二と十四

二十三と

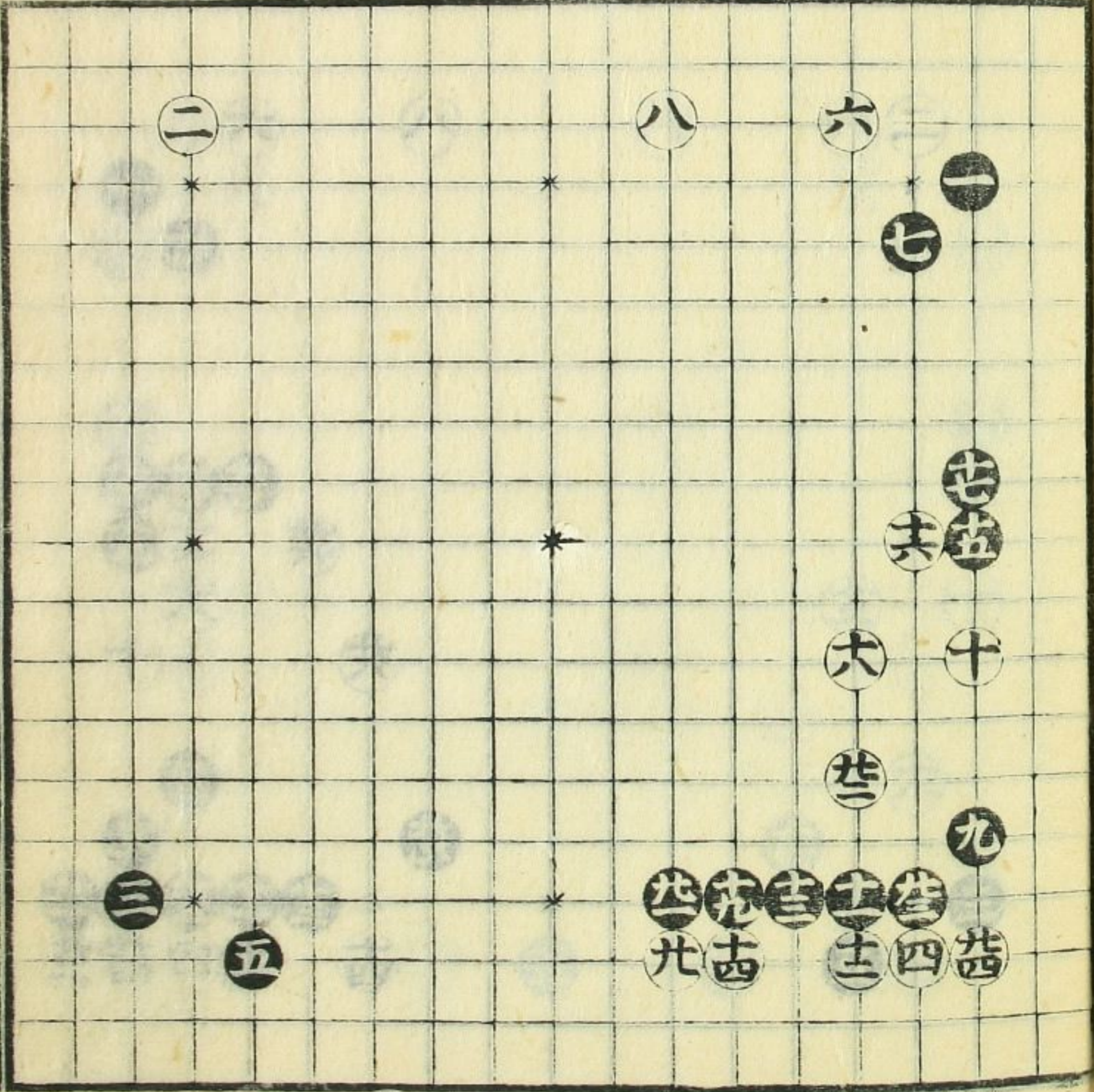
此石と先の石は
同じく作り合
す也



方二と十五

二十四と

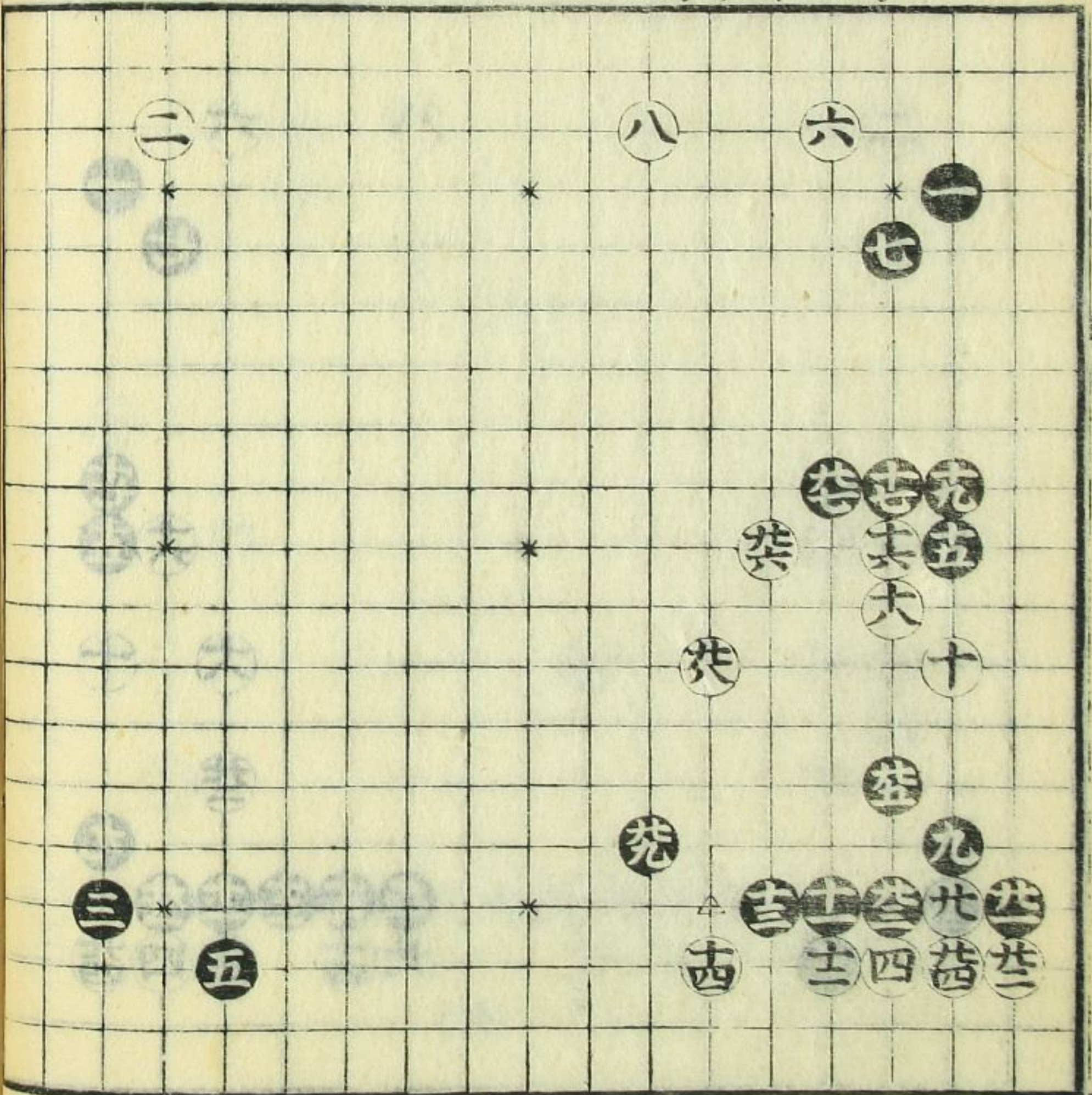
白十六と世の附
黒十七とと採すに
あはぬや一此石を
あて黒かしてあ
らざるを知らし
次に記す



廿二之十六

二十九と

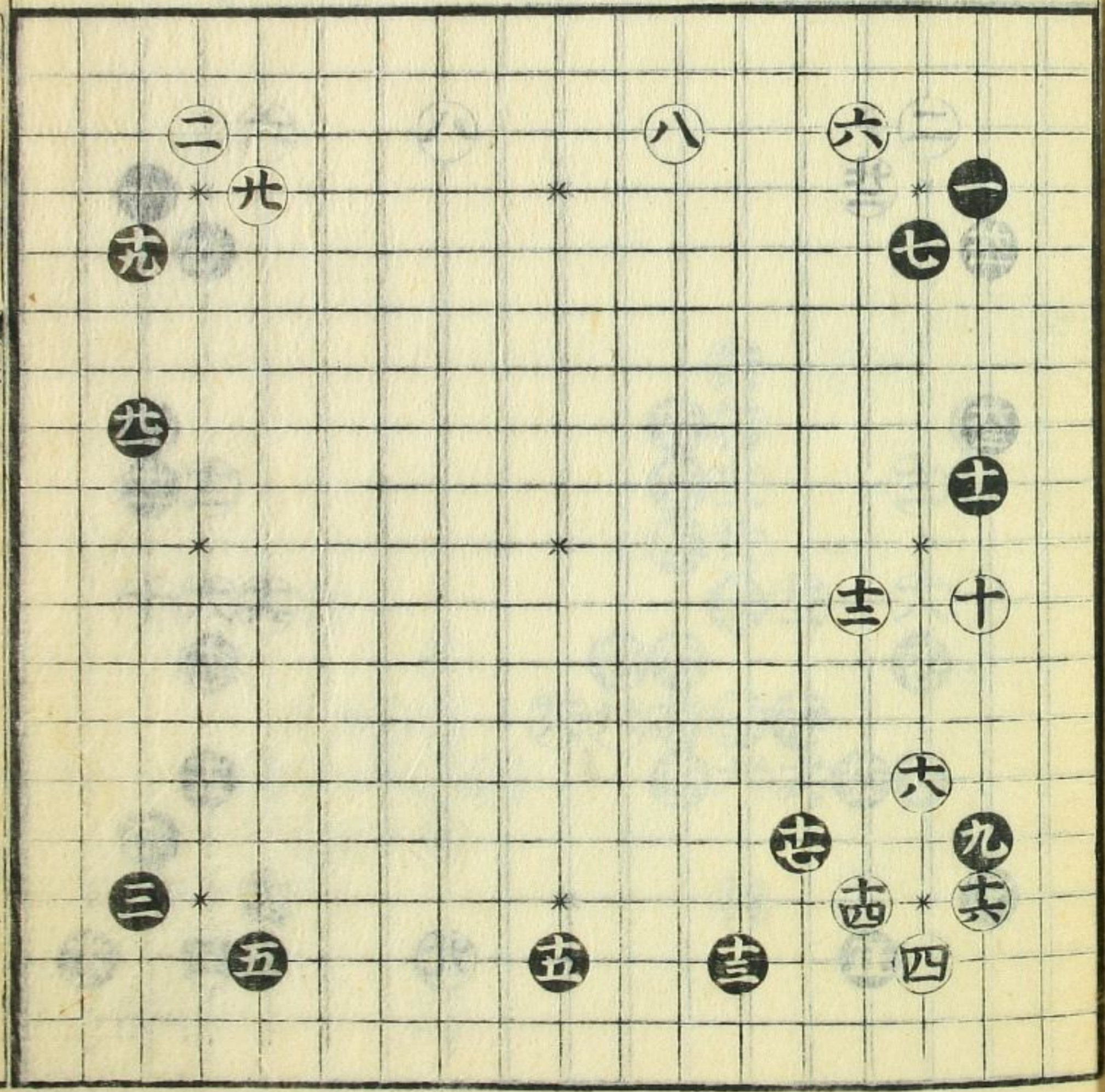
斯のやくぬりても
先の勢ひ怪なり
此處にて黒を白十
回のみと△印押す
見合を有事を知
る



廿二之十七

二十一と

斯のやく白△三回
挟打を三回挟れ
あらくはありては
ゆめり△かくのこ
ろく打なり先い
きぬひきりぬ

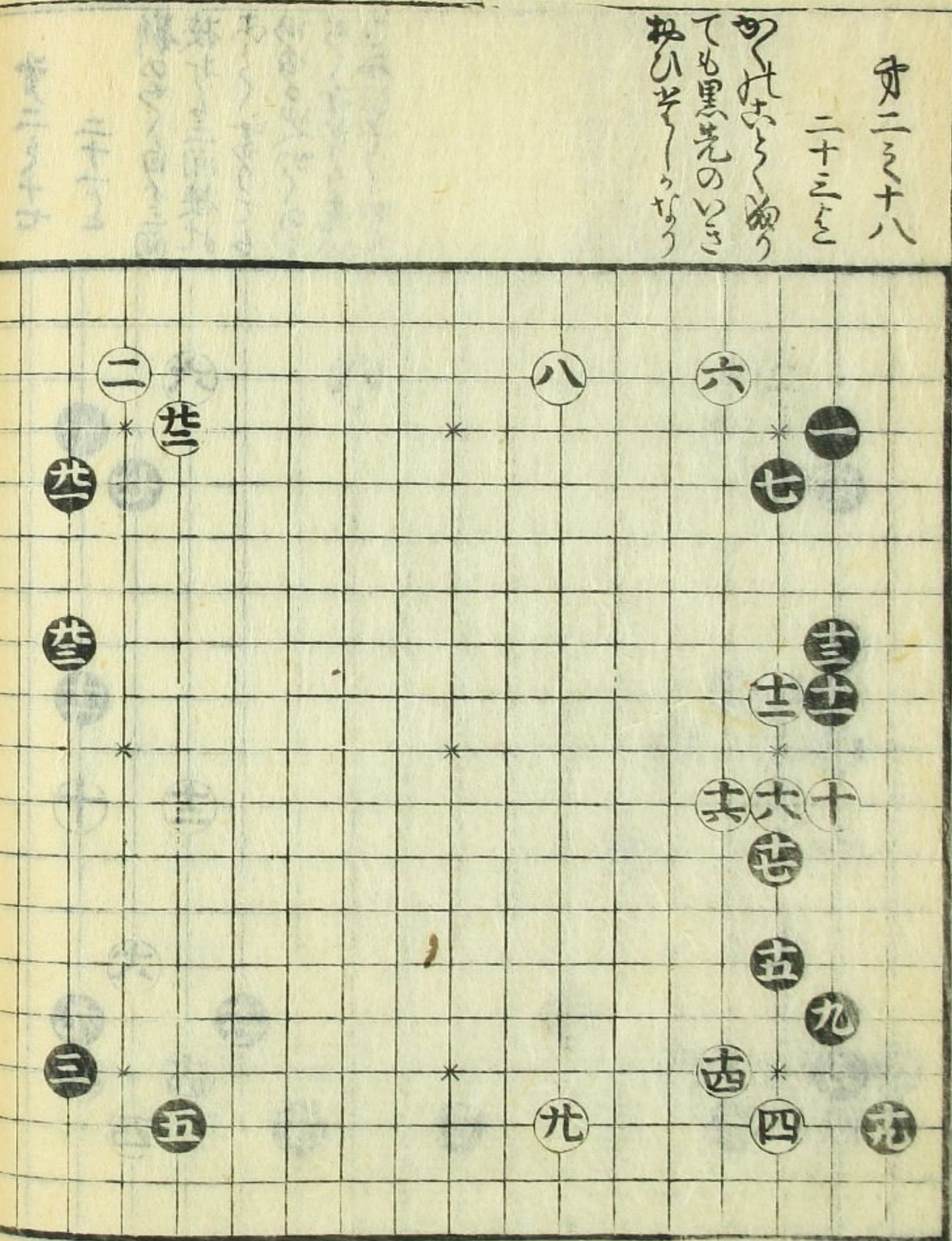


長立 総旨 巻之

才二と十八

二十三と

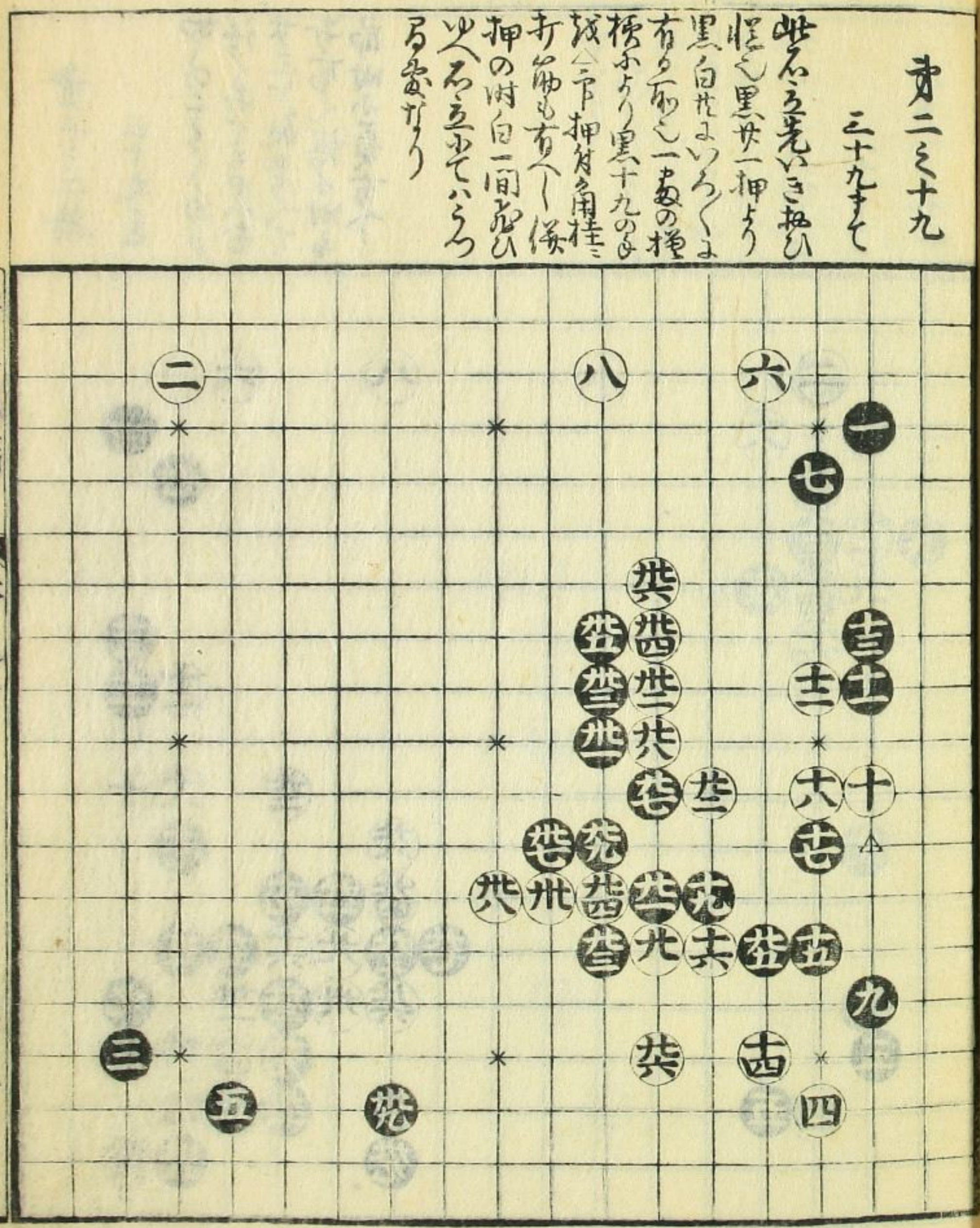
つれはよくあう
ても黒先のはこ
ぬひきくうちう



才二と十九

二十九と

此石を先いきぬ
怪し黒先一押より
黒白はよつらくよ
有る所一ある様
標より黒十九の
成三下押角用桂
打筋も有へし係
押の対白二間ぬひ
少るよとてはうろ
る安かり



碁譜
續編
卷之

碁譜
續編
卷之

才二と二拾

三十九と

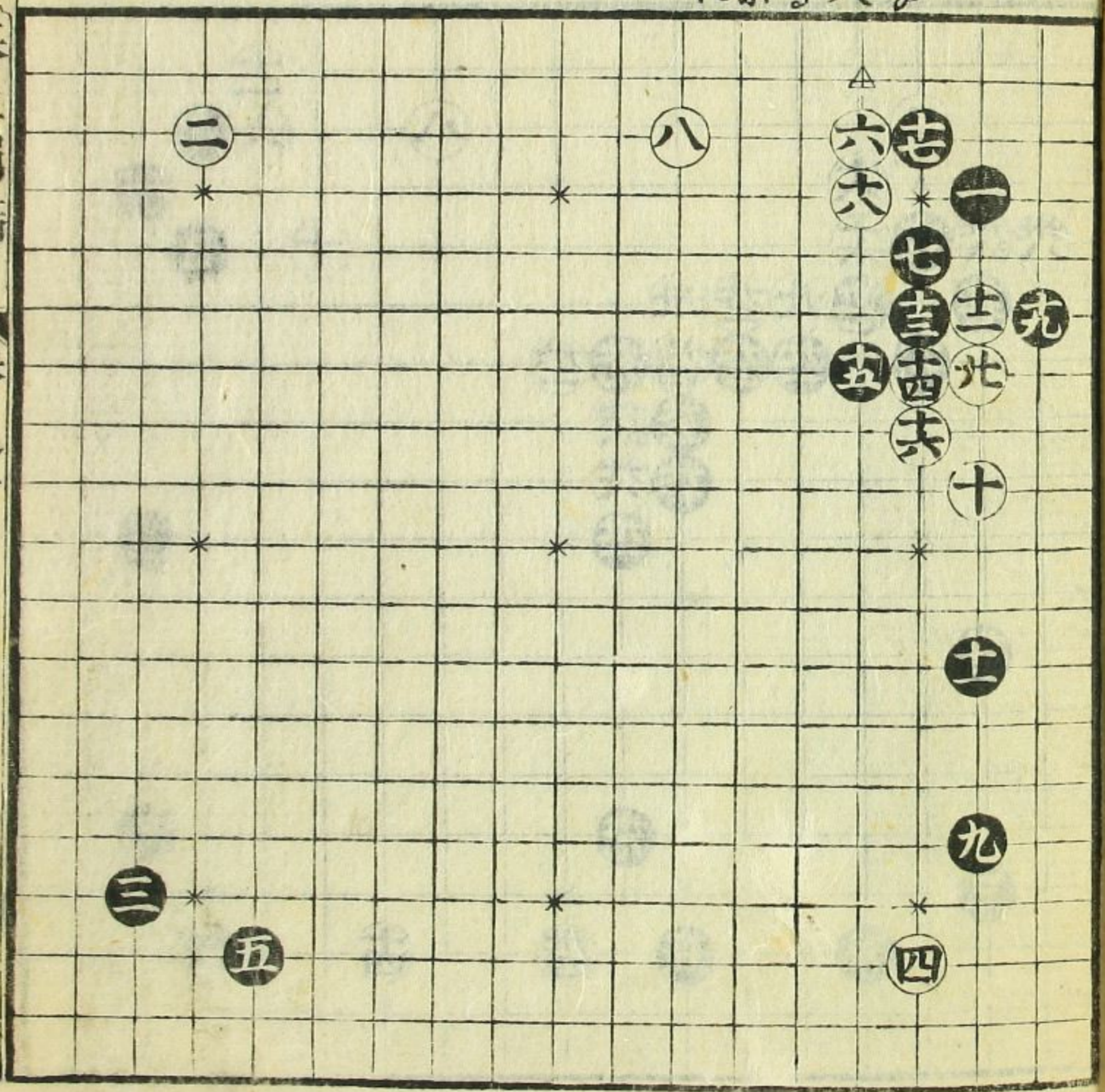
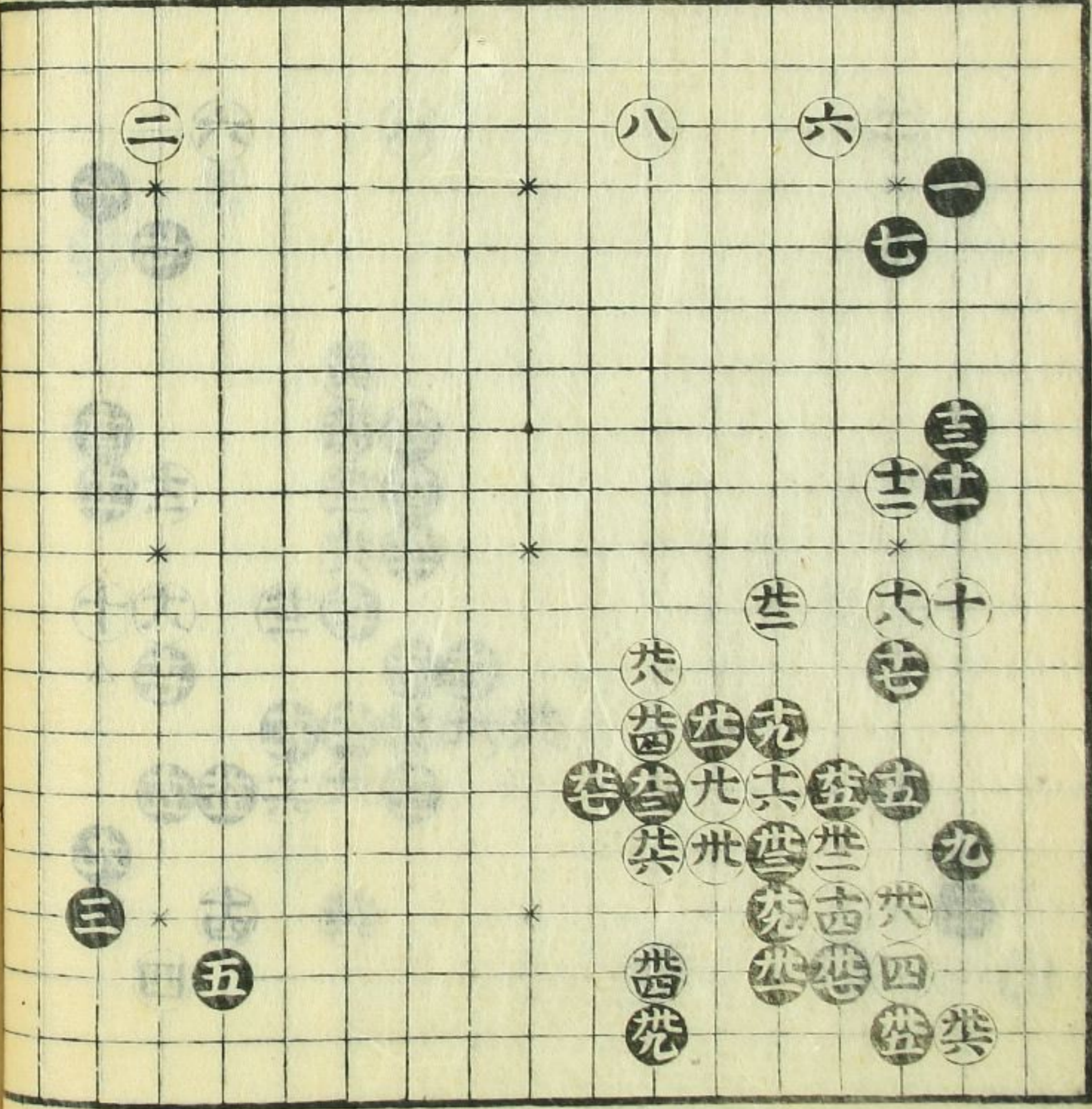
切のこゝく白の
法く打ても黒を
才二と能考へて
打りて得る附を
即附小負有へ

才二と才二

二十と

此る五黒紛れを
く打りて白十八
の(下)△(上)△(中)△
角へ黒ハの(下)△
ても切のこゝくに
打りて

碁立月節
卷之



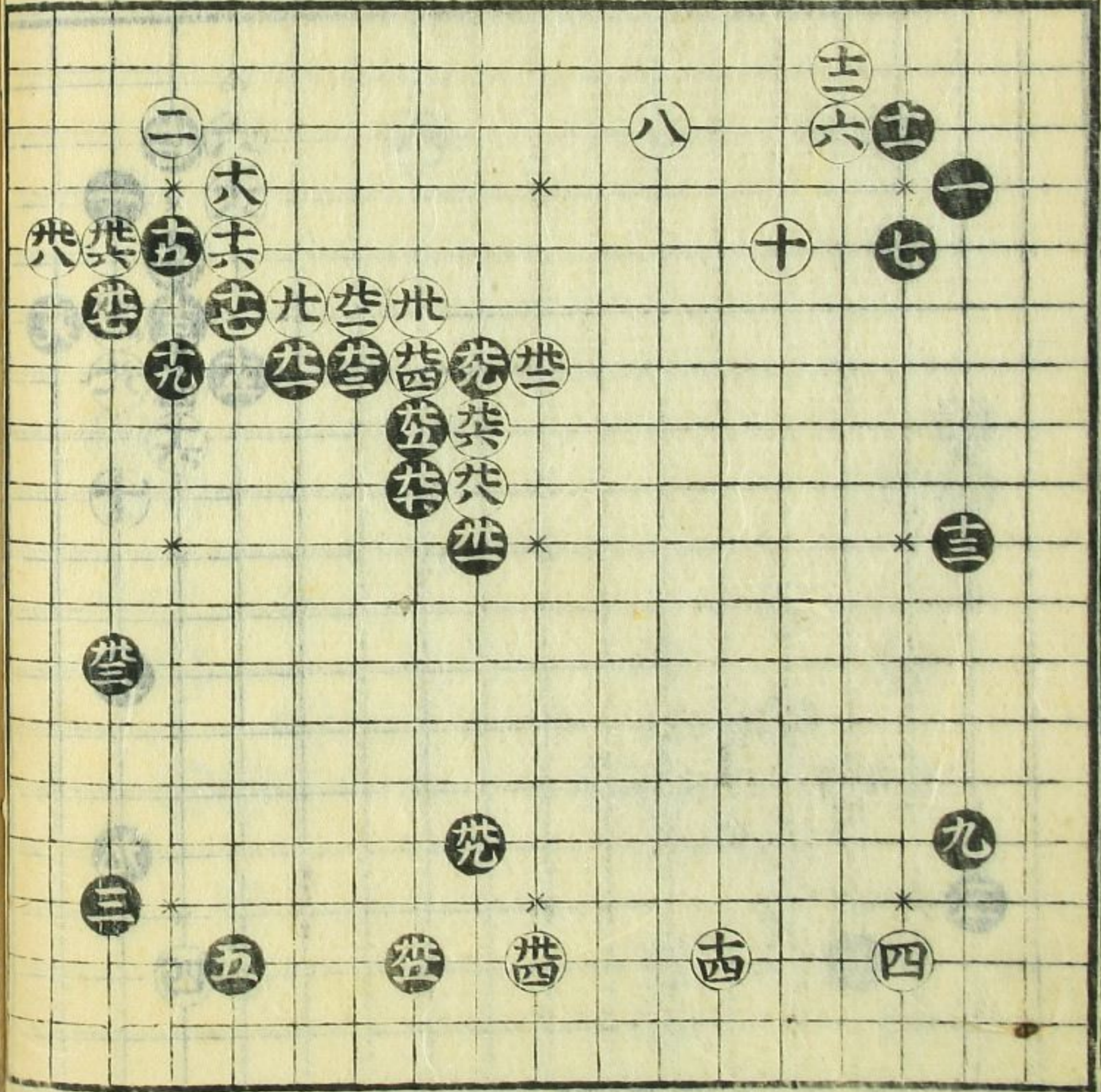
碁立月節

卷之

才二之廿二

二十九と

此石立先の勢ひ
ゆり去りて捕
負の氣が暴り
融るへて打てそ
勝やまらばと



碁譜
卷之

←

